

マクロス U.C.

真仁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦1999年、突如宇宙より飛来し太平洋上の南アタリア島に墜落した巨大物体は、全長1,200m超もの宇宙戦艦だった。これにより異星人の实在と彼らの間の戦争の存在を知った人類社会は、宇宙からの脅威に対処すべく地球統合政府を樹立。世界規模の紛争（統合戦争）を経て、墜落艦を改修し「マクロス」と命名する。

2009年のマクロス進宙式当日、地球付近に異星人の艦隊（ゼントラーディ軍）が出現する。その存在を感知したマクロスの主砲シテムが勝手に動作し、戦艦群を撃破してしまう。マクロスの正体はゼントラーディと敵対する陣営、監察軍が仕掛けたブービートラップであり、人類は否応なく異星人との戦争に巻き込まれることとなる。ゼントラーディ軍の包囲網から逃れるため、マクロスはフォールド航行により月の裏側への待避を図る。しかし制御に失敗し南アタリア島一帯を巻き込み、冥王星軌道付近に到着する。さらにフォールドシテム自体も消失し、通常のロケット推進のみでの地球への長い帰還の旅を強いられることになる。

しかし彼らはまだ知らなかった。このフォールド事故がただの転移では無かった事を、そして自らがこれから巻き込まれるであろう戦乱の新たな火種となる事を……。

目次

プロローグ	1
ファースト・コンタクト	3
ブラインド・バトル	7
ボーイ・ミーツ・ガール	14
メモリー オブ マルス	20
タイム・ドリフター	28
ダイダロス・アタック	40
ユニバーサル・センチュリー	50
シヤングリラ	58
アール・ガン	65
サイン・オブ・ゼータ	70
デュアル・インターセプト. 1	78
デュアル・インターセプト. 2	83

プロローグ

広大な宇宙、その中を進む一隻の宇宙戦艦があった。それは戦艦と
いうにはあまりにも巨大であり戦艦というよりもむしろ要塞といっ
た表現が当てはまる大きさだった。

SDF—1 マクロス

それはかつて突然宇宙から落下してきた巨大戦艦であった。地球
の物よりも遥かに優れた技術で作られたその戦艦は人類に異星人の
存在を知らしめるには十分すぎる存在だった。解析の結果、その戦艦
は人類よりも遥かに大きな巨体を持った異星人が乗っていた事が分
かり、人類は来たるべき星間戦争に備えこの戦艦を修復、更に戦艦か
ら得られたオーバーテクノロジーを利用して新型兵器の開発を行っ
た。こうして到着した宇宙戦艦、通称A S S—1は地球人用の戦艦と
して修復・改修が施され、新たにSDF—1 マクロスとして地球防
衛の要となる筈であった。

しかし、マクロスの改修が終わり、進宙式当日。その時は突然訪れ
た。マクロスの主砲システムが勝手に作動、衛星軌道上にいた異星人
の戦艦を攻撃したのだ。実はマクロスは元々衛星軌道上にいた異星
人の艦隊と対立する勢力の物で敵対する勢力の接近を感知すると自
動で迎撃するブービートラップが仕掛けられていたのだ。

図らずも異星人の艦隊に対し先制攻撃を仕掛けてしまったマクロ
スはそのまま異星人との戦闘に突入。しかしこちらはマクロス一隻
に対し、向こうは艦隊。徐々に追い詰められたマクロスは装備されて
きたフォールドシステムによるフォールド（ワープ航法）により月の
裏側にワープし回り込もうとする。しかし人知を超えた技術である
フォールドシステムもまた原因不明の暴走を引き起こしマクロスだ
けでなく周囲にあった南アタリア島の街や避難民の入ったシエル
ターごとフォールドを開始してしまいその姿を地球から消した。後
に残ったのは南アタリア島があった巨大なクレーターだけだっ
た……。

マクロスがフォールドによって飛ばされたのは月の裏側では無く、地球からやく48億km離れた冥王星付近だった。

そこにはマクロスだけでなく南アタリア島の街の残骸やシエルター、マクロスの護衛に回っていた統合軍の水上艦も一緒に飛ばされていた。マクロスは避難民やそれらの残骸を全て回収、幸い巨大な異星人用に作られていたマクロスは地球人が使うにはあまりにも巨大な為、艦内には広大な余剰スペースが存在していた。

しかしマクロスのフォールドシステムがフォールド時に消滅してしまいマクロスは再びフォールド航法を行う事が出来なくなってしまう。地球からあまりにも離れてしまったせいか統合軍本部とも連絡がつかない状況下でマクロスの艦長、ブルーノ・J・グローバルが下した決断は通常エンジンでの航行による地球圏帰還であった。

それはあまりにも途方も無い旅路であったがマクロスに避難した南アタリア島の人々も回収した街の残骸や物資を再利用し、マクロス艦内の余剰スペースを利用し、南アタリア島の街を再建、艦内に街を作り生活を再開した。

こうして、冥王星から地球までの遙かなるマクロスの旅が始まった。

ファースト・コンタクト

マクロスが通常航行で地球に帰還を始めて5ヶ月が経過した。その間も共にフォールドしてきたと思われるゼントラーデイの艦隊と何度か交戦し、主砲が使えなくなるなどのトラブルに見舞われながらもマクロス防衛の要である統合軍の新型兵器、可変戦闘機「VF-1バルキリー」の奮戦や「トランスフォーマーシヨン」や「ダイダロスアタック」などの戦法を編み出し、なんとか切り抜けていた。

しかし、マクロスが火星付近に到達した頃、ゼントラーデイの追撃が何故か突然パツタリと止まってしまった。

マクロス艦橋

グローバル「むう……」

艦橋ではマクロス艦長のグローバルが愛用のパイプをふかしながら何やら思索していた。

シャミー「艦長！ブリッジ内は禁煙です！」

ブリッジオペレーターの一人、シャミーがグローバルを注意する。

グローバル「ん？おお、すまん」

注意を受けたグローバルはそそくさとパイプをしまう。

クローディア「艦長、何か考え事ですか？」

落ち着いた雰囲気のアフリカ系を思わせる褐色の肌の女性オペレーター、クローディアがグローバルの様子を見て尋ねる。

グローバル「ん？ああ、ここ数週間ゼントラーデイ軍の襲撃が無いものでな……」

キム「そう言えば、確かに……」

髪型をショートカットにしたボーイッシュな雰囲気のおペレーター、キムもこれまでの交戦記録を見ながら答える。

ヴァネッサ「地球の勢力圏に近づいてきたから警戒してるんじゃないですか？」

グローバル「あれだけの戦力を持ち、衛星軌道上まで接近してきたのか？」

メガネをかけ、キムやシャミーより少し大人びた感じのおペレーター

ター、ヴァネツサが推論するがグローバルはそれを否定した。

グローバル「奴らが何を考えているかわからない以上、注意を怠らないようにするべきだな。早瀬君、バルキリー隊の定時パトロールの方はどうなっている？」

グローバルに呼ばれた毛先をカールさせた特徴的なロングヘアのオペレーター、早瀬未沙が報告をする。

未沙「次の定時パトロールは・・・ヴァーミリオン小隊です」

その時、一瞬未沙が眉を潜める。その様子を見てクロードディアがふっ、と笑う。

クロードディア「まだ気にしてるの？あの坊やおばさん呼ばわりされた事」

未沙「別に気にしてなんかないわ」

そう言つて未沙は顔を背ける。

クロードディア「未沙はまだ19歳だものね？そりやおばさん呼ばわりされたら機嫌も悪くなるわよね？」

未沙「気にしてませんったら！」

グローバル「やれやれ・・・」

溜息をつきながらグローバルは帽子を深くかぶり直した。

マクロス左舷 空母プロメテウス 格納庫

空母プロメテウス。本来は洋上艦で南アタリア島でバルキリー隊の空母としてマクロスの護衛を担当していたのだが前述のフォールドに巻き込まれ、現在はマクロスの左舷にドッキングされている。今はマクロス周辺の定時パトロールの為、3機のバルキリーが発艦準備を行っている。

輝「ヴァーミリオン1、発艦準備完了！」

白地に赤いラインの入ったバルキリーのパイロット、一条輝がコクピット内の計器をチェックし報告する。

柿崎「ヴァーミリオン2も準備OKです！」

マックス「ヴァーミリオン3、いつでも行けます」

輝の機体の両脇に並んでいる白地にライトブラウンの機体のパイロット、柿崎速雄と同じく白地にブルーの機体を駆るマクシミリアン・ジーナスも続いて報告する。

クローディア「デルター、了解しました。ヴァーミリオン小隊発進して下さい」

柿崎「あれ？今日は早瀬中尉じゃないんですか？」

発進許可を出すクローディアに対し柿崎が疑問を投げかける。

クローディア「ええ、パトロールの担当がヴァーミリオン小隊って知ってちよつとね」

輝「なんだよそれ！俺たちじゃ頼りないってか!?!？」

ヴァーミリオン小隊の隊長を務める輝は理由を聞いて憤慨する。

クローディア「そういう訳じゃないわ。正確にはあなたにおばさん扱いされた事を気にしてるみたい」

未沙「ちよつとクローディア!」

輝「19歳なんて立派なおばさんだろ!」

未沙「なんですって!」

輝「なんだよ!」

グローバル「あー、クローディア君。そろそろ発進してもらって構わんかね?」

クローディア「あら？申し訳ありません艦長。ヴァーミリオン小隊、発進どうぞ」

輝「一条輝、出ます!」

柿崎「柿崎速雄、出撃します!」

マックス「マクシミリアン・ジーナス、行きます」

3機のバルキリーがプロメテウスの滑走路から発艦し、宇宙に飛び出して行く。

マクロス周辺のパトロールを行うヴァーミリオン小隊。特に変わった様子も無く、宇宙は静寂に包まれていた。

柿崎「異常無し!ヒマなもんですね〜隊長」

マックス「柿崎君、油断していると不意打ち食らって落とされますよ？」

柿崎「大丈夫、大丈夫！ここんところゼントラーデイも現れないし、何かあってもこの柿崎速雄にお任せですよ！」

輝「全く・・・ん？」

パトロールを楽観視している部下に呆れていた輝だったがふと外に目をやる。遠くでハッキリとは見えないが巨大な影が確認出来た。

輝「柿崎、マックス、アレを見ろ！」

輝に呼ばれて部下の二人も巨大な影を見つける。

柿崎「なんですかね？あれ・・・」

マックス「巨大な・・・岩塊みたいですが・・・」

輝「火星も近いからな。アステロイドベルトから流れて来たのか・・・」

正体を探る為、岩塊に接近するヴァーミリオン小队。岩塊は近づくにつれ段々ハッキリとその全容を表す。

マックス「隊長、かなり大きいですよコレ！」

柿崎「しかも変な形してますよ？まるで岩塊が2つくっ付いた様な・・・」

輝「ツ!?？見ろ！コイツ推進ロケットが付いてるぞ！コイツは自然に出来た物じゃない、人工的に作られた物だ！」

その時、岩塊の中から無数の光が出てくる。光は段々と大きくなりそれがこちらに向かってきているものとわかった。

輝「やっぱゼントラーデイか！来るぞ！各機、散開して迎撃！」
敵の接近を認識した輝は指示を出し、3機はバラバラに散らばる。

輝の白いバルキリーの前に岩塊から出てきた光がその正体を現す。

輝「ゼントラーデイ!?？新型か！」

それは輝が見た事もない機体だった。緑色の装甲に身を包み、マシンガンを持った1つ目の巨人が輝バルキリーの前に立ちはだかるのであった・・・。

ブラインド・バトル

輝のバルキリーの前に立ち塞がる緑色の巨兵。その頭部にあるピンク色の1つ目が怪しく光る。

輝「ううっ！」

輝はその巨体に一瞬怯んでしまうがすぐに落ち着きを取り戻し、操縦桿を傾ける。

輝の白い機体は右に大きく傾き、緑の巨兵を回避する。

敵は右手に携帯したマシンガンを構え、輝のバルキリーを狙って発砲する。しかし、高速で飛行するバルキリーを捉える事は出来ず銃撃を回避した輝は距離を取る。

輝「コイツ！これでも喰らえ！」

輝がミサイルの発射ボタンを押すとバルキリーの主翼下部に懸架されたミサイルが一斉に発射された。しかし……

輝「な、なんだ!??どうしたんだ!??」

発射されたミサイルはどれも見当違いの方向に蜘蛛の巣を散らす様に飛んでいってしまい敵機に一発も当たらなかった。

輝「くそ！もう一度！」

輝は再度距離を取り照準を合わせ、ミサイルを発射する。しかしまたもやミサイルは敵機に誘導される事なくメチャクチャな飛び方をして飛んでいく。

輝「ミサイルが使い物にならない!??どうなってんだ!??」

今まで何回かゼントラーデイとは戦闘を行なってきたがこのような事態は初めてであった。事態に困惑しながらも輝は離れた場所で戦闘している部下達に通信を送る。

輝「柿崎！マックス！ミサイルが使い物にならない、注意するんだ！」

しかしいくら待っても二人からの返答はない。

輝「柿崎、マックス！聞いているのか！聞こえたら返事をしろ！」

ザ・・・ザザ・・・

返答を求め、耳をすませる輝だったか聞こえてくるのはノイズ音の

み、二人からの返答はない。

輝「まさか・・・通信まで妨害されているのか!?？」

バルキリーの主力兵器であるミサイルが使えず味方機との交信すらも出来ない事態に次第に輝の中の焦りが大きくなっていく。そんな輝を追い詰めるかのように緑色の機体がマシンガンで攻撃する。

輝「くっ！」

輝は機体を回転させながら銃弾を回避、そのまま機首を敵機に向けるように方向転換をする。機体の正面に1つ目の巨兵を捉えた輝はそのまま敵機目掛けて突っ込んでいく。

輝「うおおおっ！」

突然突っ込んできた敵機に驚きながらも緑の機体はマシンガンを構えて発砲する。輝は操縦桿を細かく動かして機体を操りマシンガンを避けながら減速せずに突っ込む。

戦闘機が減速もせずに突っ込んでくる様子を見た緑色の機体は手に持っていた銃を手放し、代わりに片手持ちの斧のような武器を取り出す。どうやらギリギリまで引きつけたところで白兵戦で仕留めるつもりらしい。

輝のバルキリーが目の前に来たタイミングで緑色の機体は持っていた斧を振り下ろした。

しかしその瞬間、あり得ない事が起きた。戦闘機が後方へバックしたのだ。正確には目の前に来たタイミングでいきなり戦闘機が急減速したかと思うと後ろに下がったのだ。

振り下ろした斧は虚しく空を切り大きな隙が生じる。

バルキリーのコクピット内の輝はターゲットスコープを見つめ、操縦桿についているトリガーをゆっくりと引く。

ガガガガガッ！

バルキリーの下部に搭載されたガトリング砲が火を吹き、たちまち緑色の機体は穴だらけになってしまう。緑色の機体のパイロットが最期に見たのは戦闘機のエンジンが下を向いて動いており、それがまるで「足」のように伸びている様だった。「足」の生えた戦闘機、その姿はまるで「鳥」のようだと思った所で機体は爆炎に包まれた。

輝「はあ・・・はあ・・・」

何とか敵機を一機撃墜する事に成功した輝。しかしミサイルやレーザー、通信が思うように使えないのではこれ以上まともに戦う事は出来ないだろう。

輝「一度退くしかないか・・・」

幸い、通信は出来なくても二人が何処にいるかは戦闘の光で確認出来た為、輝はその方向へバルキリーを向かわせる。

輝「接触通信くらいは使えば良いけど・・・」

一方その頃、散開して迎撃に当たっていたマックス機も同じ問題に直面していたが・・・

マックス「それならば・・・」

マックスは青いバルキリーを巧みに操り敵の攻撃をかくぐり接近する。先程、輝が相手をした機体とは異なるタイプのようにこちらは黒と紫のツートンカラー、ずんぐりとした体型に十字形の頭部を持っておりやはり頭部にはピンクの1つ目がある。

大柄の機体は携帯していた武装のバズーカ砲を撃ってくるがミサイルと違いまっすぐにしか飛ばず、尚且つ弾速も遥かに遅いバズーカ砲が当たるはずも無く容易に接近出来た。マックス機もまた敵機の前まで接近しロケットエンジンを逆噴射させて目の前で停止する。すると大柄の機体の胸部から突然激しい閃光が発せらる。

マックス「ッ!!? 目眩しか!」

眩しさに一瞬間を背けるマックス。その隙を逃すまいと大柄の機体は背中に背負っていた長い棒状の物を抜いて振り下ろそうとする。その刀身はマックスが昔見たSF映画に登場するビーム剣のように光っている。

マックス「そうはいくか!」

すぐに持ち直したマックスは素早くロケットを吹かしてその場で機体をクルリと一回転させて右に移動させ斬撃を交わす。

大柄の機体は続けて攻撃しようとするがその瞬間、特徴的な十字形

の頭部に衝撃が走る。破壊された頭部のカメラが最期に捉えたのは戦闘機の後ろから手が出てきて構えた銃をカメラ目掛けて突っ込む様子だった。

マックス「まず1つ」

ガガガガッ！

頭部にガトリングガンを突っ込んだままトリガーを引き、機体を内部から破壊するマックス。やがて機体は爆発し、マックス機はその爆発を避ける為に距離を取る。

味方機の爆発を見た近くにいた他の敵機が何機か接近してくるが一瞬その動きを止める。爆炎を灯りにして宇宙空間に浮かび上がったその敵のシルエツトがあまりにも「異様」だったからだ。何故ならばその敵機の姿は手と足が生えた戦闘機だったのだから……。

マックス「敵機確認、迎撃します」

レーダーが使い物にならない為、マックスは敵機を目視で確認するとそこ目掛けて操縦桿を傾ける。それと同時にコクピット内の「F」と書かれたレバーを下げる。手足の生えた戦闘機は途端に元の戦闘機の形に戻り、敵機の中に向かっていく。

マックス「ミサイルの誘導機能は使い物にならない……それなら！」

敵機はマシンガンやバズーカで攻撃を仕掛けるが、マックスの機体にはかすりもせず簡単に接近を許してしまう。

マックスは再び下げるレバーを「F」から「G」に変更する。その瞬間戦闘機は再び手足が生えた状態に変形し、その場を横にスライドするかの様に移動する。それは通常の戦闘機や人型兵器には出来ない機動だ。

マックスはコクピットのターゲットスコープを覗いて狙いを定める。

マックス「誘導が効かなくても、この至近距離なら！」

マックスはミサイルの発射ボタンを押して一斉にミサイルを発射する。ミサイルは輝の機体と同様に散り散りになって飛んでいくが敵が至近距離に密集していることもあって

何発かが命中、敵機は爆散する。辛うじて回避出来た機体もマックス機の構えたガトリングガンに狙われて撃墜されてしまう。

その場にいた敵機は全てマックスにより撃墜されてしまった。

マックス「敵は・・・もういないみたいですね。早く隊長や柿崎君と合流しないと」

そう言うとマックスは機体を再び戦闘機に変形させて、戦闘の灯りを目印にそちらに機体を向かわせた。

柿崎「うわあああっ!?!?」

こちらはライトブラウンの柿崎機。元々他の二人と比べると操縦技術においては一步及ばない所がある彼は、レーダーも通信もミスイルすらまともに機能しない現状においてパニックを起こしていた。その動揺が敵にも伝わったのか徐々に敵が集まってきて柿崎機を包囲する。

得体の知れない機体故に鹵獲しようとしているのか直撃は避けて攻撃を仕掛けてくる。その内の一機がワイヤーを射出して柿崎機の主翼に巻きつける。他の機体も同様にワイヤーを巻きつけ引つ張る。どうやらこのまま基地へ連れていく気らしい。

柿崎「た、助けてー!」

そんな柿崎の願いが通じたのかどうかは定かではないが輝のバルキリーが救援に駆けつけた。

輝「柿崎いつ!」

輝機はワイヤーで牽引している機体目掛けてガンポッドを発砲する。ガンポッドは牽引中の一機な命中、このままでは身動きが取れないと判断したのかワイヤーを切り離して戦闘態勢に移る。

輝「くっ!」

そこにマックスのバルキリーも合流、急加速で敵機に肉迫し、ミサイルを発射する戦法で敵機を攻撃する。

輝「マックス!」

マックス「隊長、ここは僕がくいとめます。今のうちに柿崎君を！」
輝「わかった！頼むぞマックス！」

マックス機が囷となり敵を引きつけている間に輝はあちこちから煙を上げて動かない柿崎機の元へ。

輝「柿崎、大丈夫か!?!」

柿崎機に接近する輝。どうやら近距離であれば多少のノイズは入るものの通信は可能なようだ。

柿崎「な、なんとか・・・。でも機体はあちこちやられちゃって動けません！」

輝「わかった。コクピット部分だけ切り離すぞ！」

輝はバルキリーを手足の生えた状態「ガウオーク」形態に変形させてマニユピレーターで柿崎機を外部から操作し機首部分のみを切り離す。

切り離れた機首部分を左腕に取り付ける。かつて輝自身もまだ軍に入る前にゼントラーデイとの戦いに巻き込まれて訳もわからずバルキリーに乗って撃墜された際に現在の上官に同じやり方で助けられた事があった。

輝「いいぞ！マックス！この宙域を離脱する！」

マックス「了解！」

輝とマックスはバルキリーを戦闘機形態「ファイター」に変形させて高速飛行で離脱する。

敵の人型兵器も追撃しようとするがスピードがあまりにも違いくぎる事、機体の推進剤の残量もあり、追撃を断念した。そこに白く塗装された大柄の機体が出てきて僚機に通信を送る。

「逃したのか?」

「ハマーン様申し訳ありません。ただの宙間戦闘機と侮っておりまして」

「おかげでこちらは地球圏に帰還する前に練度の高いベテランパイロットを多数失った」

ハマーンと呼ばれた白い機体のパイロットは不機嫌そうに返す。

「しかし敵の機体の一部を入手しました。必ずジオン再興のお力にな

るかど・・・」

ハマーン「ふん・・・どうだろうよ・・・」

ハマーンはコクピットのモニター越しに機首が無くなりボロボロになって破棄された柿崎の機体を見ていた・・・。

ボーイ・ミーツ・ガール

謎の人型兵器の攻撃を振り切りなんとかマクロスに帰還を果たしたバーミリオン小隊。

輝は機体を空母プロメテウスの滑走路に着艦させる。すぐに整備員が懸架していた柿崎機のコクピットブロックを外したり機体の損傷具合などのチェックを始める。

輝もコクピットから降り、柿崎をコクピットから引つ張り出す。

輝「大丈夫か柿崎？」

柿崎「は、はい・・・助かりました隊長」

そこに機体を機体を置いたマックスも来る。

マックス「隊長、柿崎君、ご無事でなによりです」

輝「助かったよマックス。お前が足止めしてくれたおかげで柿崎も助けられた」

柿崎「ホントだよ。レーダーも通信も効かなくてオマケにミサイルまで使えないのによく戦えたよ」

マックス「ミサイルの狙いがつけられないなら、相手も避けにくいかな？って思ったんです。後は当てやすい位置に相手を誘導すれば・・・」

輝「俺だつて一機撃墜するのがやつとだったのに」

柿崎「・・・ホント、天才だよなあお前・・・」

マックス「そうかな？僕って天才なのかな？」

自分のやってる事が凄いという自覚が無い為か惚けた顔をするマックス。格納庫内に入ると金髪の男性が輝達の所へ近寄ってくる。フォッカー「輝！この野郎！連絡もよこさないで何処をノンビリ飛んでやがった！」

男性はそう言いながら輝の肩に手を回す。言葉とは裏腹に顔は笑っている。

輝「イテテ！先輩勘弁してくださいよ。こちとら訳わかんない敵の新兵器に襲われてそれどころじゃなかったんですから」

輝に先輩と呼ばれたこの男性の名はロイ・フォッカー。バルキリー

航空部隊、スカル大隊を預かる隊長であり輝達の所属する統合軍の誇るエースパイロットだ。輝とは軍に入る前からの知り合いで輝にとってはよき兄貴分といった所である。

フォッカー「敵の新兵器？そりや本当か？輝」

輝「機体のガンカメラを見れば写つてると思えますよ」

輝の言葉を聞いてフォッカーの表情が変わる。

フォッカー「ふむ・・・実はお前達が出撃してる間急に連絡が取れなくなつたんでマクロスのブリッジが少し慌しくなつたんだ」

マックス「やはり、そちらもそうでしたか・・・」

柿崎「レーダーもミサイルも無力化されちゃつたんですよ！」

フォッカー「ふむ・・・。輝、帰つてきて早々で悪いが俺と一緒にブリッジが上がってくれ。その二人も一緒だ」

輝「え・・・今からですか？」

今からブリッジに行くと言っていて輝の様子が変わる。

フォッカー「今からだ。場合によっちゃ今後の戦略に関わってくるからな。何か気になる事でもあるのか？」

輝「あ、いや・・・別に・・・」

口ではそう言いつつも目が泳いだりソワソワしており何か隠しているのは明らかなのだが。フォッカーはその様子を見てピンと来て・・・

フォッカー「ハツハアーン？さては・・・ミンメイちゃんか？」

フォッカーにそう言われて輝はドキツとする。

フォッカー「凶星だな？女の子待たせてるんじゃないやあしようがねえ！行ってこい輝！俺たちは先に上がってるから終わってからとっとと来い！以上！」

そう言うとフォッカーは柿崎とマックスを連れて行ってしまった。

輝「せ、先輩・・・」

マクロスタウン

マクロス艦内に作られた街であり戦闘に巻き込まれ避難した南アタリア島の民間人達が暮らす居住区でもある。

元来南アタリア島に住んでいた住人達はその殆どが外から移住してきた人々であり、その中にはASS-1の改修作業を行う統合軍人や物見遊山で改修中のマクロスを見に来る観光客などをターゲットにした商売人も多くそれらの人々が中心となってマクロス周辺に街を作った。元々そういった経緯がある為か精神的に逞しく、フォールド事故に巻き込まれ冥王星に飛ばされた後も一緒にフォールドで飛ばされた街の残骸を回収してもう一度艦内に街を作って自力で生活を再開し始めた。

通常航行での長距離移動を余儀なくされたマクロスにとって戦艦の中という閉鎖空間で長期間過ごさねばならない状況にあつてこの街の存在は避難した民間人だけでなくマクロスのクルーにとつてもメンタル面で大きな助けとなっている。

パイロットスーツから急いで軍服に着替えた輝はマクロスタウンの中を走って移動していた。走っている間にも腕にはめた時計を気にしている。

やがて目的の場所に到着し、辺りをキョロキョロ見回す。

輝「やっぱ遅かった・・・か」

輝が諦めて帰ろうとすると突然後ろから何者かに両目を手で塞がれる。

輝「うわ！・・・まさか・・・ミンメイ?」

輝は手をそつとどかしながらゆっくり振り向く。

ミンメイ「女の子を待たせるなんて男としてどうかと思うぞ! 一条輝?」

そこには少し青みを帯びた黒髪をなびかせて少女が笑いながら立っていた。

輝「あ、ああ・・・ゴメン。今日、定時パトロールの当番だったから・・・」

ミンメイ「ふうん、そうなんだ? 軍人さんは大変なものね?」

約束より任務優先？とばかりにわざと軍人の部分を強調し意地悪く言うミンメイ。

輝「し、仕方ないだろ、任務なんだから」

ミンメイ「ハイハイ、軍人さんは大変だあ〜♪」

ミンメイはその場でクルクルと踊った後ピツと敬礼のポーズをする。

ミンメイ「でもちゃんと約束守って来てくれたし許してあげる。

あ、そうだハイ、コレ！」

ミンメイは一枚の手紙を渡す。

輝「コレって・・・？」

ミンメイ「私のバースデーパーティの招待状。叔父さんたら張り切っちゃって店を貸し切りにして盛大にやるっていつてるのよ？」

ミンメイの叔父は南アタリア島のとときから中華料理店『娘々』（にやんにゃん）を営んでおりミンメイはマクロスの進宙式を見に叔父の家に遊びに来ていた事から今回の騒動に巻き込まれる事になった。

輝「もしかして、約束ってコレの為？」

ミンメイ「あ！もうこんな時間！バイトに遅れちゃう！」

携帯電話の時計を見たミンメイは急いで帰ろうとする。

輝「あ！ちよつと・・・」

ミンメイ「じゃあね輝！パーティ絶対来てね！」

呆然と立ち尽くす輝を置き去りにしてミンメイは足早に去っていった・・・。

マクロス ブリッジ

フォッカーは柿崎とマックスと共にブリッジに上がり実際に戦った二人の話を聞きながら艦長やブリッジクルーに定時連絡が途絶えた際の状況説明をしていた。

グローバル「・・・つまり戦闘が始まった途端、通信もレーダーも効かなくなつたと？」

フォッカー「そのようです」

クローディア「新しいジャミングシステムか何かでしょうか？」

グローバル「うむ・・・機体のガンカメラの映像は出せるかね？」

ヴァネッサ「はい。バーミリオン1、一条機の映像です」

未沙「そういえばその一条少尉はどうしたの？」

フォッカー「一条少尉はちよいとヤボ用がありましたね。なあに終わらせたらずぐに来ますよ」

未沙「ブリッジに報告に上がるより大事な用事ですか？それは是非聞いてみたいですね？本人の口から」

明らかに不機嫌になる未沙。元々軍人の家系の娘である為か性格も生真面目な所があるので仕方ないとも言えるが・・・。

フォッカー（輝、こりや覚悟しといた方がいいぞ・・・）

ヴァネッサ「映像、出ます」

ブリッジのモニターに輝が交戦した緑の機体が映し出される。

フォッカー「確かに今までのゼントラーデイの兵器とは違う感じだな」

グローバル「君もそう思うかね？フォッカー少佐」

フォッカー「ええ、サイズも今までの戦闘ポッドよりも大型ですし、

それに・・・」

クローディア「それに？」

フォッカー「武装が全て実弾だ」

未沙「そういえば・・・確かに」

フォッカー「今までのゼントラーデイの奴らの機体は武装にミサイルは積んであってもメインの武器はビーム兵器だった。しかしこの機体達は実弾系のマシンガンやバズーカなどで武装しているのが気になる」

キム「手持ちの武器の方が互換性があるからでは？」

フォッカー「ならば実弾系の武器にする必要はあるまい？」

キム「あ、そっか・・・」

クローディア「艦長、どう思われます？」

グローバル「・・・」

グローバルは暫く考え込んでいたが輝とマックスの戦闘記録を見

て眩いた。

グローバル「ジャミングか・・・」

未沙「え？」

グローバル「敵が使っていたジャミングだよ。ジャミングの影響下ではレーダーや通信、ミサイルが使えなくなる。」

そうなると必然的に戦闘は直接敵機を認識しての戦闘、有視界戦闘が主となる」

フォッカー「なるほど・・・、確かに有視界戦闘なら射角が限定される固定兵装を増やすよりも携帯火器の方が効率はいいか・・・」

グローバル「ビーム兵器を使わない理由まではわからないがな・・・。いや、機体の外観もゼントラーデイのものとは少し異なるように思える。もしかしたら・・・」

モニターに拡大して映された緑の機体を凝視しながらグローバルは呟く。

グローバル「ゼントラーデイとも異なる新たな敵かもしれない」

メモリー オブ マルス

輝達が火星付近での謎の機動兵器との交戦から数日、マクロスでは新たな問題に直面していた。

クローディア「艦長、やはりいくらサーチしてもサラ基地の反応はありません」

グローバル「ううむ・・・」

マクロスが地球に向けて航行を続けて五ヶ月、艦内に余りある余剰スペースを使い街を再建し、南アタリア島から一緒に飛ばされてきた街の物資や、艦内に造られた生産プラントを稼働させつつも、それも限界に達しようとしていた。

物資を補給する必要がある。その為の手段としてグローバル艦長は火星にある統合軍の基地施設、サラ基地に目指すように指示した。サラ基地は先の統合戦争中に戦況の激化に伴い放棄された基地であり人こそいないが物資はまだ残されているのではと考えたのだ。

しかしレーダーには肝心のサラ基地の反応は一向に現れなかった。やがてマクロスの左舷プロメテウスに大型のレドームを付けたバルキリーが一機、着艦する。

未沙「艦長、火星周辺の偵察に出ていたヴェーバーが帰艦しました・・・やはりサラ基地は見つからなかったそうです・・・」

そう報告する未沙の表情は暗い。

グローバル「そうか・・・。すまん早瀬君、君に辛い思いをさせてしまった」

未沙「いえ・・・私も軍人の娘です。公私はわきまえておりますから・・・」

プロメテウス格納庫

輝はバルキリーをデッキブラシで擦っていた。

結局あの後すぐにブリッジに向かったのだが議題はすでに終了しており遅れてきた輝は未沙からキツイお叱りを受けた。一応フォツ

カーからは体面上の罰としてバルキリーの清掃を命じられる事での場は収まり、今に至るといふ訳だ。ムスツとした顔で作業しているとフォツカーが様子を見にきた。

フォツカー「よう輝！」

輝「先輩・・・コレ、いつまでやればいいんですか？」

フォツカー「ん？ああ、まあこんなモンでいいだろ。あくまで体面上の罰だしな。で？どうだった？」

フォツカーが輝の肩に腕を回しながら聞いてくる。

輝「どうって・・・？」

フォツカー「ミンメイちゃんに会ってきたんだろ？上官として部下の様子を気にかけるのも立派な職務だからな！」

輝「それ、先輩が単に知りたいだけじゃないですか？」

フォツカー「細かい事はいいんだよ！で？どうだった？キスくらいはしたのか？」

輝「キスなんてしてませんよ・・・。あ、でも・・・」

そう言うと輝はミンメイから貰った招待状を取り出す。

輝「バースデーパーティーの招待状を貰ったんですよ、ミンメイから」

フォツカー「招待状？ななんだ。お前もか」

輝「お前も・・・？」

フォツカーは輝が持つてるものと同じものを見せる。

フォツカー「悪いな、俺も招待されてるんだ。俺だけじゃないぞ、バルキリー隊の奴ら全員持つてる。当然柿崎やマックスもな」

輝「え・・・」

フォツカー「ま、そういうことだ。残念だったな輝！彼女をモノにしたいならもつと強気で行った方がいいぞ？」

男は時として自分から強引に行かないといけない時もある！」

輝「強引に・・・ですか？」

フォツカー「まあそうククヨクヨすんな！そこは一度勝つ為なら何度負けても恥じる事のねえ男の戦場だからな！」

そう言うとフォツカーは行ってしまった。淡い高揚感もすっかり冷めてしまい一人残された輝は招待状を見つめ立ち尽くすのだった。

マクロス ブリッジ

結局、火星での補給もする事が出来ずマクロスはそのまま地球圏に向かい航行を続けていた。

グローバルは偵察に出たバルキリーの撮影した画像をジッと見ていた。

グローバル「本来ならここにサラ基地があるはずなのだが・・・」
クローディア「画像を解析してみましたがそれらしき施設は周辺にも発見されませんでした」

ヴァネッサ「基地が丸々一つ消えちゃうなんて・・・」

キム「そんな事あるんですか？」

未沙「もう一度調べて下さい！きつと砂嵐か何かで遮られて見えなだけで・・・」

クローディア「未沙、落ち着きなさい。あなたらしくないわ」
食い気味に艦長に進言する未沙に対しクローディアが冷静に止める。

クローディア「未沙、少し休みましようか。ここのところ働き詰めですもの。これじゃあなたの方がまいってしまおうわ」

未沙「私は平気よ・・・」

クローディア「またいつ戦いが始まるかわからないんだから休める時は休みなさい。よろしいですね？艦長？」

グローバル「ああ、構わんよ」

クローディア「そういう事、少し頭を冷やしなさいな」

未沙「・・・それでは失礼します」

そう言うとき未沙は俯きながら出ていってしまった。

オペレーターの三人はその様子を不安げな表情で見っていた。

ヴァネッサ「あの、早瀬中尉・・・何かあったんですか？」

シャミー「ホント、なんかいつもの中尉じゃないみたいだし・・・」

クローディア「サラ基地にはね、早瀬中尉の思い人がいたのよ」

未沙の様子を気にした三人に対しクローディアがそう教える。

マクロスタウン

バルキリーの清掃も終わり輝は気晴らしに街に来ていた。とはいえ欲しい物もやりたい事もないのでただ街をブラブラ歩きまわっていた。

輝「ふう・・・」

歩き疲れた輝は近くのベンチに腰を掛ける。ちょうど自走式の自販機が目の前に来た為、飲み物を買う事にする。

輝「ん？」

自販機に硬貨を入れようとした輝は未沙の姿を見つめる。

先程自分を注意した際の強気な姿ではなく思いつめた表情でベンチに座っている。

輝「・・・」

クローディアから休むように言われ気晴らしに街に出てはみたものの未沙の頭からは火星の事が離れられずにいた。

未沙「ライバー・・・」

考え込んでいると目の前に缶コーヒーが現れる。顔を上げると輝が缶コーヒーを差し出していた。

輝「・・・コーヒーは嫌い？・・・でありますか？」

慌てて言い直しながら尋ねる輝。

未沙「どうゆう風の吹きまわしかしら？」

輝「別に・・・なんか思いつめた顔をしてたからさ。・・・余計なお世話だったかな」

顔を背けながら答える輝。

未沙「・・・頂くわ。ありがとう」

コーヒーを受け取った未沙はフタを開けて一口飲んだ。

輝「・・・何かあったの？・・・あつたんですか？」

未沙「今は任務中ではないし・・・敬語なしでもいいわ」

輝が無理に敬語で話そうとするのが可笑しいので未沙はそう伝え

る。

未沙「あなたに言ってもしょうがないし・・・」

輝「話せば楽になる事だってあるだろ？」

未沙は下を向いたまま静かに話し始めた。

未沙「私の家は代々軍人の家系なの。私も幼い頃は将来は軍に入る事になるのかと考えていたけれど・・・その時はあまり軍人という仕事を好きになれなかったの」

輝「じゃあどうして・・・」

未沙「ライバー少尉、統合軍の軍人で学生の頃から私に優しくしてくれた人だった。彼と一緒にいると不思議と軍人に対する抵抗感も薄れていって、いつしか彼と同じ立派な軍人になりたいと思う様になつていたわ」

輝「その人は・・・地球に？」

輝の問いに未沙は首を横に振る。

未沙「統合戦争の始まった頃、火星のサラ基地に・・・」

でも統合戦争の激化に伴いサラ基地は閉鎖され滞在していた人達は地球に帰還する筈だった・・・」

輝「だった・・・？それってどういう・・・」

未沙「帰還途中の船団が反統合同盟軍の襲撃を受けて・・・全滅という知らせだったわ」

輝「そんな・・・」

未沙「もし火星を通るのであればサラ基地にある彼に繋がる物だけでも、と思っただけけど・・・そううまくはいかないみたい」

話を終えた未沙が立ち上がる。

未沙「あなたの言う通り話したら少し楽になったみたい。さ、任務に戻らなくちゃ。少しは見直したわよ。・・・ありがとう」

未沙は輝に笑顔で感謝を述べて去っていった。

輝「・・・」

普段の生真面目な彼女からは想像もできない笑顔に暫く呆気にとられていた輝だったがハッと我に帰る。

輝「いやいや、可愛いなんて思っていない思っていない・・・」

自分に言い聞かせる様にブツブツ呟きながら軍の宿舎への帰路に着いた。

未沙がブリッジに戻ると何やらブリッジ内が騒々しい。

未沙「早瀬未沙中尉、只今戻りました。・・・何かあったんですか？艦長？」

グローバル「早瀬中尉か。ああ・・・コレだ」

グローバルがモニターを指差す。モニターにはマクロスの広域レーダーの映像が映されていた。マクロスから少し離れた所に何かの反応を示す点が発光していた。

未沙「これは・・・」

クローディア「救難信号よ。しかも・・・火星のサラ基地からの帰還船団の物と一致したの」

未沙「ッ!?!?」

ヴァネッサ「でも・・・サラ基地の帰還船団は統合戦争中に・・・」

キム「まさか・・・幽霊とか・・・?」

シャミー「へ、変な事言わないでください!」

未沙「艦長!今すぐ救援を!」

未沙はグローバルに詰め寄る。

グローバル「落ち着きたまえ早瀬君。敵の罠の可能性もあるのだ。

不用意に艦を危険に晒す事は出来ん」

未沙「しかし・・・!」

クローディア「未沙、あなたの気持ちは良くわかるわ。でもね、それは艦長も同じなのよ?」

未沙「え・・・」

クローディア「サラ基地からの帰還船団が反統合同盟軍の襲撃を受けた時、救援に向かった統合軍を指揮していたのはグローバル艦長のよ」

未沙「艦長が・・・」

クローディア「救援が間に合わず目の前で救えなかった艦長の気持

ちも考えてあげなさいな」

未沙「……申し訳……ありませんでした……」

グローバルから離れた未沙は深々と頭を下げる。

グローバル「昔の事だ……。それにライバー少尉や他の乗員達を救えなかったのは事実だ。君には申し訳ない事をした……」

未沙「そんな事ありません！私は……」

グローバル「今の所はこちらに影響する事は無いが万が一という事もある、無視して進む訳にも行くまい……。早瀬君」

未沙「は、はい！」

グローバル「偵察機『キャッツアイ』で救難信号の発信源を調査してきて貰いたい」

未沙「艦長……」

グローバル「やってくれるな？」

未沙「……はい！」

グローバル「護衛のバルキリー隊も連れて行くのを忘れないようにな。クローディア君」

クローディア「はい艦長。現在待機しているバルキリー隊は……あら？」

未沙「どうしたの？」

クローディア「バーミリオン小隊。ふふ、あの坊やとはつくづく縁があるみたいね？」

未沙「もう！からかわないで！」

そう言つて未沙は準備の為ブリッジを出た。

クローディア「……あの子、前ほど嫌な顔しなくなったわね？何かあったのかしら？」

同じ頃、マクロスから少し離れた宙域では一隻の小型船が数機の機動兵器に襲われていた。

機動兵器は丸い球状のポッドに脚が生えたような機体が数機、そして指揮官機と思わしきこれまた戦闘ポッドに脚と銃口を備えた手の

ようなものが生えた機体だ。

小型船の中では突然の襲撃に乗員達が混乱していた。

「何なのこの機体達は!??こんな機体のデータタイターズにもジオンにも無いわよ!??」

水色のロングヘアの女性が外の機体を見て叫ぶ。そこに乗員の一人が駆け寄る。

「ルー!この船はもうダメだ!お前だけでも逃げろ!」

ルー「でも!この機体はどうするのよ!??」

「お前がこれに乗って脱出しろ!モビルスーツのコクピットの中の方がよっぽど安全だ!」

ルー「そんな・・・ダメよ!皆も!」

「頼む!お前だけでも生き残れ!生き残ってこの新型を・・・アーガマまで届けるんだ!」

ルー「そんな・・・きやあつ!??」

船内の至る所で爆発が起こる。もうこの区画も持たないだろう。

「行け!ルー!ルカ!」

ルー「う・・・ゴメン・・・皆ゴメン!」

やがて小型船が爆発を起こす。攻撃した戦闘ポッドが爆発に巻き込まれないよう後退をすると爆発の中から一筋の光が放たれポッドの1つを貫く。

小型船の爆発の中から白い人型の機体が飛び出す。

ルー「行くわよ・・・Zガンダム!絶対に生き残って、アーガマに・・・カミーユ・ビダンにこの機体を届ける!」

白い機体、Zガンダムの目が光り、戦闘ポッド達に向かってバーニアを吹かしながら飛び込んでいった・・・。

タイム・ドリフター

プロメテウス バルキリー格納庫

整備員「少尉達の戦闘記録を参考にミサイルの誘導装置を少し変更しました。敵機を目視可能な距離まで接近しなければなりません。これでミサイルの誘導が少しはマシに効くようになります」

輝「……」

整備員「少尉？」

輝「……あ！すまない、大丈夫だ」

整備員「そうですか？それでは……武運を」

そう言っただけ整備員は輝のバルキリーのコクピットから離れる。

輝「……」

コクピットに一人になった輝は計器を確認するがその様子は何処か落ち着きが無い。

マックス「隊長、準備完了。いつでも行けます」

輝「……」

マックス「隊長？大丈夫ですか？」

輝「……あ、だ、大丈夫だ。何でもない」

柿崎「なんか元気ないですよ隊長？もしかして……ミンメイちゃんど喧嘩でもしたんですか？」

輝「くだらない事言っただけでとっとと出撃するぞ！」

柿崎「り、了解！」

出撃の1時間前……

未沙と別れた後、プロメテウスに戻ろうとしていた輝だったが街中で偶然ミンメイを見かける。

輝「おーい！ミンメイー！」

ミンメイの所に駆け寄ろうとした輝だったが途中でその足を止める。

ミンメイは見知らぬ男性と一緒に歩いていた。ミンメイはその男

性の腕を引きながら笑顔で歩いており、その様子は妙に親しげな印象を輝に与えた。輝が暫く呆気にとられている内にミンメイらは人混みの中に消えてしまった。

輝「……………」

輝は漠然としたモヤモヤを抱いたまま街を後にするのだった。

出撃後も浮かない表情の輝。柿崎、マックスとの三機編成で飛行していると後方から偵察機キャッツアイが発艦し、輝達の機体の後方に付く。

未沙「一条少尉、キャッツアイの護衛、頼むわね」

輝「え? ……あ、はい! 了解であります!」

未沙「ちよつと ……大丈夫なの? それとも、私の護衛じゃ不満なのかしら?」

輝「そんな事はありません! 全身全霊、命を懸けて中尉殿をお守りします!」

未沙「そ、そう? ……頼むわね、一条少尉」

ルー「このおっ!」

一方、Zガンダムを駆りゼントラーデイの機動ポッド群に応戦していたルー・ルカ。ゼントラーデイの機動ポッドリガードの一機が上部に装備されたビーム砲を発射する。ルーはZのスラスターを吹かしそれを回避、リガードからから距離を取ろうとするのだが ……

ルー「ううっ!」

ビームは掠めるようにZガンダムの横を通過するがそれは狙って行われたものではなく偶然そうなっただけである。Zガンダムはスラスターを小刻みに吹かしながら体制を整えようとするがその動きはフラフラとしておりぎこちない。

ルー「ダメ ……やっぱり私にはこの機体は ……!」

元々あるエースパイロットの専用機として設計、開発されたZガンダムはシュミレーター訓練を数回行っただけの新兵同然のルーにはとても扱いきれるものではなかった。必死に手にしたビームライフルの照準を合わせビームを発射するが自身の姿勢制御もままならない状態では当たるはずもなく難なくかわされてしまう。そんな状態のZガンダムに向かい、リガードの一機が上部にビーム砲の代わりに搭載されたミサイルを発射する。発射されたミサイルはZガンダム目掛けて飛んでいく。

ルー「やられる!!?」

しかしミサイルはZガンダムに当たることなく四方八方に散っていつてしまう。

ルー「え・・・?なんで・・・」

リガードはミサイルが見当違いの方向へ飛んでいくのを見て動揺したのか動きが止まる。

ルー「ツ!今なら・・・!」

その隙を見逃さずルーはビームライフルのトリガーを引く。放たれたビームはまっすぐリガードを撃ち抜きその場で爆発が起きる。

ルー「やった!」

喜ぶのも束の間、味方機を撃墜された残りのゼントラーディ軍はZガンダムを落とそうと一斉に迫る。

ルー「このままじゃ・・・どうすれば・・・」

その時、Zガンダムのセンサーが何かを感知して警告音を鳴らす。それと同時にミサイルが数発飛来してゼントラーディ機に命中する。

ルー「味方機!?!?・・・違う、エウーゴの識別信号じゃない・・・」

センサーが反応した方へZガンダムのメインカメラを向けるとこちらに向かつて飛来する機体を発見する。それは・・・

ルー「戦闘・・・機・・・?」

歴史の教科書で見たような旧時代の戦闘機のようなフォルムの機体が3機、Zガンダムの前に姿を現した。

輝「ヴァーミリオンリーダーより各機へ!相手はゼントラーディだ!散開して攻撃を開始!」

その頃、マクロス艦内のマクロスタウン

街を歩いていたミンメイは一緒に歩いていた男性が立ち止まったのに気がつく

ミンメイ「あら？どうしたの？色男さん」

男「・・・その色男って呼び方はやめろ」

ミンメイ「いいじゃない。あなた、綺麗な顔してるんだし！遠くから見たら女性みたいよ？」

男「俺をからかっているのか！・・・あ、おい！」

怒っている男を尻目にミンメイはいきなり走り出すと喫茶店のポスターの内容に食いつく。

ミンメイ「ねえねえ！コレ期間限定の新メニューだって！一緒に食べましょうよ！」

男「つたく・・・どつかの誰かにソツクリだな・・・」

ため息をつきながら男はミンメイの所へ歩いていく。

その後二人はポスターの新メニューを頼んで席に着き二人で他愛の無い話をする。

ミンメイ「でね、輝ってば私をロボットの手で握ったまま左手が取れて私を空から落としたのよ」

男「そ、そうなのか？あ的一条輝が・・・」

ミンメイ「輝の事知ってるの？」

男「え？あ、いや・・・ちよつとな。バルキリー乗りの間じや有名なだから・・・」

ミンメイ「ふーん。確かに飛行機の操縦は得意って言ったものね。でももつと優しく操縦して欲しいわ、空中で私を落とした後もキャッチしてコクピットの中に入れてくれたけど髪の毛メチャメチャになっちゃったんだから」

男「それも十分凄いなと思うけどな・・・」

ミンメイ「じゃあ今度はあなたの事教えてよ色男さん。なんで道端に倒れてたの？」

男「だから色男はやめろ！・・・さあな、覚えてない」

ミンメイ「それはさつき散々聞いた。自分の名前も覚えてるから記憶喪失でもないんでしょ？なんで教えてくれないのよ」

男「いいだろ。別に」

ミンメイ「意地っ張りね！そんなんじや女の子にモテないぞ！」

男「ほっとけ！余計なお世話だ！」

ミンメイ「何よその言い方！もう知らない！じゃあね！・・・あ」
立ち上がった際にミンメイのバッグから一枚のチラシが落ちる。
それは男の足下に落ち、男はそれを拾う。

男「これは・・・ミス・マクロスコンテスト？」

ミンメイ「返して！」

ミンメイは引つたくるように強引にチラシを取り返す。

男「出るのか？それ」

ミンメイ「・・・うん。元々はマクロスの進宙式のイベントの一つだったんだけどね、こんな事になって中止になってたのを街が完成した記念にやる事になったんだって」

男「そうか・・・それで・・・」

ミンメイ「お店の看板娘だからきつといいとこまでいける！って町会長さんが勝手に応募しちゃったの」

男「そんな事情があったのか・・・。アンタはそれでいいのか？」

ミンメイ「え？」

男「自分じゃなくて他の誰かが決めた事を納得して出来るのかって事さ。アンタはそれで良いのか？」

ミンメイ「・・・輝がね」

男「は？」

ミンメイ「輝がね、今軍隊に入って私達を守る為に頑張ってるの。だから私も何かやりたいな、変えてみたいなって・・・そう思ったの。だから・・・平気、かな？」

男「・・・そうか、つまらない事を聞いて悪かった」

ミンメイ「いいわよ別に、気にしてないし。じゃあそろそろ帰り・・・」

ドオオオツ！

ミンメイの声を遮り、突然巨大な轟音と共に街が大きく揺れる。

ミンメイ「きやあつ!!?」

男「地震!? いや、そんなのはありえないな・・・」

間髪いれず今度は爆発音が街に響き渡る。

ミンメイ「こ、今度は何?」

男「爆発!? くそ! 何が起こってるんだ! 一体・・・!」

二人の会話の少し前、ゼントラーデイと交戦中のZガンダムを発見した輝達ヴァーミリオン小隊、見慣れないシルエットの機体に彼らは戸惑いの表情を見せていた。

柿崎「た、隊長! 何ですかあの機体は?」

マックス「バルキリー よりも一回り大きいですね・・・」

輝「人型か・・・新型のデストロイドか? 早瀬中尉!」

輝は後方に待機している偵察機キャッツアイに搭乗してる未沙に機体の映像を送る。

未沙「私も知らない機体ね・・・マクロスが地球を離れてる間に開発された新型という可能性も否定出来ないけど・・・」

輝「けど?」

未沙「機体の外観というか、形状というか・・・バルキリーやデストロイドとは何か違うような気がするわ」

マックス「別系統の技術で作られた物、という事ですか?」

未沙「ええ、もしかしたら反統合同盟軍の可能性も・・・」

輝「反統合同盟でもなんでも地球人に変わりはないでしょう! ゼントラーデイに襲われてるなら助けるべきだ!」

柿崎「隊長の言う通りですよ! 助けましょう! 中尉!」

未沙「・・・そうね、でも向こうはこちらを味方とは思ってくれるとは限らないわ、後ろにも注意して!」

輝「了解!」

3機のバルキリーはゼントラーデイ機に向かって攻撃を開始する。

輝「敵が視認出来る距離まで接近……！」

輝はリガードの攻撃を最小限の動きで避けながら接近、ミサイルの照準を示すターゲットサイトがロックオン可能になった事を示すと同時に発射する。ミサイルは吸い込まれるようにリガードに向かっていき直撃、その場で爆発する。

輝「よし！正確に、とはいかないけどこれなら……！」

実際ミサイルの何発かは外れており狙いの精度は低下しているのだが全く使い物にならないよりはマシである。輝が戦っている部下達の様子を気にして目をやるとマックスはやはり変形を駆使しながら手際良く、柿崎も気合で奮戦していた。

輝「あつちも大丈夫そうだな」

部下達の様子を見て安心した輝は正体不明の機体に接近する。

輝「その所属不明機！聞こえるか！返事をしろ！」

通信で何度も呼びかけるが応答は無く、統合軍、反統合同盟軍、あらゆる周波数での呼びかける。が、やはり反応は無い。

輝「仕方ない……」

輝はバルキリーを人型のバトロイド形態に変形させると手にしたガンポッドを手放し攻撃の意思がない事を伝えながら接近、そのまま所属不明機の肩に手をかける。

輝「聞こえるか！所属不明機！」

ルー「き、聞こえるわ……」

輝「良かった、接触通信は出来るみたいだな……」

所属不明機……Zガンダムとコンタクトを取る事に成功した輝はそのまま続ける。

輝「えーと……こちら統合軍所属艦SDF-1マクロス所属のヴァーミリオン小队隊長、一条輝少尉だ。貴官の名前と所属を教えてください」

ルー「反地球連邦組織エウーゴ所属、志願兵のルー・ルカ。階級は少尉よ」

輝「反……地球連邦？」

聞きなれないワードに困惑する輝。しかし考える間もなくゼントラーデイの攻撃が二機を襲う。

輝「ルー・ルカ少尉！聞きたい事は山ほどあるがまずはゼントラーデイ軍を片付けたい！援護を頼めるか!?？」

ルー「わかったわ。私も・・・こんな所で死ぬ訳にはいかないのよ！」

乙ガンダムがバルキリー隊と協力して迎撃を始めた事で次第にゼントラーデイ軍の機体も次々と撃墜されその数を減らしていく。隊長機であるリガードの上位機種、グラージに搭乗していたゼントラーデイ兵は離れた場所に待機していた母艦に援護を要請していたのだがその援軍は一向に現れなかった・・・。

同時刻、マクロスブリッジ

ヴァネッサ「艦長！前方にデフォールド反応！・・・ええ!?？」

グローバル「どうしたのだ？距離は？」

キム「め、目の前です！」

グローバル「なんだと!?？」

マクロス前方の空間が歪んだかと思うと一隻のゼントラーデイ艦が姿を現す。その距離は正にマクロスの目と鼻の先であった。

クローディア「なんでこんな至近距離に・・・?？」

シャミー「ま、まさか特攻とか・・・」

グローバル「考えるのは後だ！今は回避に全力を尽くすのだ！」

ゼントラーデイ艦は艦首を左に逸らし衝突を避けようとしている。

グローバル「こちらも艦首回頭！この距離ではもう衝突は避けられん！少しでもダメージを減らすのだ！」

クローディア「ピンポイントバリア、左舷プロメテウス付近に集めて！急いで！」

両艦が必死に正面衝突を回避しようと万策を尽くしたおかげか全面的な衝突こそ避けられたもののそれでも完全に避けきれず左舷プ

ロメテウス部分にゼントラーディ艦の側面部が衝突する。

グローバル「全員！衝突に備えろ！」

ドゴオオオオオンツ！

シャミー「キヤアアアツ！」

凄まじい轟音と共にマクロスとゼントラーディ艦が接触、ピンポイントバリアを展開していた為かろうじてプロメテウスは守られたもののそれでも完全に無傷とはいかず側面部が大きく抉れてしまう。

グローバル「だ、大丈夫か・・・？」

クローディア「は、はい。なんとか・・・。無傷とはいきませんが・・・」

ゼントラーディ艦もまた側面部が抉られていたがマクロスのようにピンポイントバリアもなかった為かそのダメージはより大きな物だった。衝突後、徐々に離れていく両艦だったがやがてゼントラーディ艦から艦載機なりガードや戦闘ポッドが出てくるとマクロスに向かってくる。

グローバル「この状況で向かってくるというのか・・・。クローディア君、プロメテウスのバルキリー 隊はどうなっている？」

クローディア「プロメテウス側面部の損傷により大破、もしくは中破の機体が多数、出せる機数は限られてます・・・」

その時ブリッジにプロメテウスから通信が入る。

フォッカー「こちらフォッカー！ブリッジ！何があった!?!？」

クローディア「ゼントラーディ艦と接触したのよ」

フォッカー「なんだと!?!?ブリッジはぶつかるまでわからねえほどボケっとしてたつての!?!?」

クローディア「敵艦がいきなり目の前にデフォールドしてきたのよ。そして今衝突したゼントラーディ艦から敵機が接近中よ」

フォッカー「クソ！コッチは機体もそうだがパイロットをかなりやられてる！出撃出来てせいぜい全隊の半分つてところだ！」

グローバル「むう・・・」

フォッカー「とにかく俺は先に出る！整備の邪魔になるからと隅っこの方に退かされてたのが幸運だったぜ。他のバルキリーも出せる

奴から順次出させる！よろしいですね？艦長！」

グローバル「頼むぞフォッカー少佐、クローディア君、艦内の民間人に急いで避難指示を出してくれたまえ。場合によっては艦内に侵入されるやもしれん。対空迎撃用のデストロイド隊を艦の内部にも何機か残しておいておくのだ」

クローディア「了解です」

フォッカーを始めとするバルキリー 隊が出撃、ゼントラーディ軍の戦闘ポッド群を迎撃するがいかんせんバルキリーの発艦部分であるプロメテウスを損傷した為、思うように出撃する事が出来ず数で圧倒的に劣る戦いを強いられる。

フォッカー「くっ！劣勢か！」

そしてグローバルの懸念通りマクロスの一部に爆発が起き、内部にリガードが何機か侵入する。

フォッカー「しまった！スカルリーダーより各機へ！艦内に敵機が侵入した！近くにいるものは艦内に侵入した敵機を掃討しろ！俺も片付いたらすぐに向かう！」

マクロスタウン

緊急の避難警報が発令中され、街中は逃げ惑う市民で溢れていた。ミンメイ達もまた避難の為、一番近いシエルターにむかっていたのだが・・・

男「クソ！なんでいきなりこんな・・・！」

ミンメイ「コツチよ！・・・キヤア！」

ミンメイ達の上空を数機のリガードが飛んでいく。

男「艦内に侵入されたのか!?？」

リガードの一機がミンメイ達の前に着地する。その銃口は彼女達に向けられている。

ミンメイ「あ・・・」

男「やめろおおっ！」

男は咄嗟にミンメイを庇うように前に出る。しかしリガードの砲撃は放たれる事無くその場で崩れ落ちる。

ミンメイ「え・・・？」

崩れ落ちたりガードの後ろに一機のバルキリーがガウオーク形態でガンポッドを構えたいた。ガンポッドの銃口からは煙が上がっている。

バルキリーはその前にゆっくり近付いてきてミンメイ達の所に来るとコクピットを開ける。

統合軍兵「大丈夫か！ここは危険だ！早くシェルターに避難しろ！」

男「は、はい！」

ミンメイ「ツ!?後ろ！」

ミンメイが指差してた方角に別のリガードが現れ、頭頂部のミサイルを1発発射する。

ドオオオン！

ミンメイ「キヤアアアツ!?？」

統合軍兵「うおおおおっ!?？」

ミサイルはバルキリーの足下に着弾、バルキリーはバランスを崩しコクピットを開けていたせいで乗っていた統合軍兵は投げ出される。

男「大丈夫か！・・・う！」

バルキリーの体勢を崩したりガードがこちらに狙いを定めている。ミンメイは先の爆風のせいで気を失っており逃げられない。

男（やられる・・・！）

死を覚悟したその瞬間、数発の銃弾がリガードに撃ち込まれる。見ると投げ出された統合軍兵が拳銃でリガードに攻撃している。

統合軍兵「俺が奴の注意を惹きつける！その隙にその子連れて逃げろんだ！」

男「何・・・!?？無茶だ！よせ！」

統合軍兵「その子を頼んだぞ！うおおおおっ！」

統合軍兵は拳銃を乱射しながらリガードの注意を惹きつける為に

二人と別方向へ走る。しかし無情にもリガードはミサイルを数発発射、ミサイルは統合軍兵の側に着弾し、彼は爆発の火炎に飲まれながら吹き飛ばされる。

男「あ．．．あ．．．！」

その様子を茫然と見ていた男、その視線は鎮座しているバルキリーに、そして側にいるミンメイに向けられる。

男「同じじゃないか．．．あの時と．．．！．．．くっそおおおっ！」

彼の絶叫と共にミンメイが目覚めます。

ミンメイ「う．．．一体何があつたの．．．？」

ミンメイの問いに答える事無く男の目はバルキリーに向けられている。

ミンメイ「まさか．．．あれに乗るつもり？無茶よ！あなた輝みたいに飛行機乗った事ないんでしょ!?？」

男「バルキリーになら乗った事があるさ．．．、戦った事もな。俺が奴を惹きつける、アンタはその隙に逃げるんだ」

ミンメイ「嫌！一緒に逃げましょう！」

男「あの兵士に言われたんだ！アンタを頼むって．．．。だから俺は君を守る！」

そう言つて男はバルキリーのコクピットに乗り込む。その後ろ姿を見ながら、ミンメイはいつの間にかこのマクロスに流れ着いていたという男の名を初めて叫んだ。

ミンメイ「アルト！」

ダイダロス・アタック

輝「コイツでトドメだ！」

輝のバルキリーはバトロイド形態で照準を合わせガンポッドとミサイル、頭部レーザー機銃の一斉射で最後に残った指揮官機のグライダーを撃破する。

マックス「敵影無し、今のヤツが最後みたいですね」

柿崎「しっかし連中どうしたんだ？途中から動きがてんでバラバラだったぜ？」

マックス「それは確かに気になりましたね。途中まではちゃんと部隊として統率がとれていたのに最後の方は戦術も陣形もメチャクチャでした」

輝「考えるのは後だ。まずは……」

輝はバルキリーをZガンダム側に移動させ接触通信を試みる。

輝「そちらの所属不明機、聞こえるな？まずは所属と状況を確認したいんだが……」

ルー「反地球連邦組織エウーゴのルー・ルカよ。この機体はZガンダム」

輝「反地球連邦組織？」

マックス「地球連邦ってなんです？」

柿崎「俺に聞くなよ」

そこに戦闘の終了を確認したキャッツアイが到着する。

未沙「一条少尉、機体とパイロットの照会は済んだ？」

輝「それが……」

未沙「反地球連邦組織……Zガンダム……」

暫く沈黙していた未沙だったがやがて一枚の画像データをルーの元に送る。

未沙「ルカ少尉、この機体を知ってるかしら？」

それは以前輝たちが交戦した未確認機だった。

輝「それは・・・俺たちが戦った新型？」

ルー「新型？ジオンのザクの事？新型どころか旧式も旧式よ」

柿崎「だって俺たちこんな一つ目のデストロイド見た事ないぜ？」

ルー「デスト・・・ロイド？何言ってるのか知らないけどそのザクは7年前の一年戦争時代に使われてた機体よ」

マックス「一年・・・戦争？」

ルー「・・・まさか、一年戦争を知らないの？冗談でしょ？一体あんた達何者なの？」

未沙「やつぱり・・・」

輝「中尉？」

未沙「にわかには信じがたいけど・・・でもそう考えれば辻褄が・・・」

柿崎「何の事ですかねえ？」

マックス「もしかしたら僕達は異世界に飛ばされてきてしまったとか？」

輝「異世界だって？」

柿崎「ハッハッハッ！ないない！そんなSFみたいな話あるわけないだろ？やっぱお前変わってるよ！ハッハッハッ！」

マックス「そうかな？僕って変なのかな？」

そこに突然キャッツアイから連絡が入る。

未沙「一条少尉！至急マクロスに帰還するわよ！」

輝「へ？なんで・・・」

未沙「マクロスが敵の奇襲を受けてるの！しかもプロメテウスが損傷してバルキリー隊が殆ど出られないらしいわ！」

輝「なんだって!?!？」

未沙「ルカ少尉、今お話した通りです。お伺いしたい事は沢山ありますが、今は一刻も早く私達の母艦に帰還する必要があります。今後の事を話し合う為にも我々に同行をお願いしたいのですが・・・」

ルー「・・・このまま漂流する訳にもいかないし・・・、こちらの身の安全は保障してもらえますか？」

未沙「それは約束します」

柿崎「でも人型の機体がバルキリーやキャッツアイについて来られるか？」

ルー「御心配無用よ」

そう言うと同時にZガンダムはアンテナが閉じて頭が胴体に引っ込んだかと思うとそのまま機体各部が変形して飛行機のような形に変わる。

ルー「巡航形態のウェイブライダー、これなら遅れる事はないわ」
マックス「すごいなあ、ロボットがこんな変形をするなんて・・・」
ルー「アンタ達も似たようなモンでしょ」

輝「よし、至急マクロスに帰還する！」

マクロス艦内 市街地

アルト「うおおおっ！」

乗り手を失ったバルキリーに乗り込んだアルトはバルキリーを白兵戦に適したバトロイドに変形させガンポッドを発砲する。しかし撃ち出された弾丸は全てかわされてしまいそのまま後方に飛び距離を取ったりガードはミサイルを発射する。

アルト「くっ！」

バルキリーを動かしミサイルを回避しようとするが反応が遅れ避けられず1発がガンポッドを持っていた右腕に直撃し前腕部が吹き飛ぶ。更に被弾の衝撃でバランスを崩し、立て直す事も出来ずフラフラと転倒する。

ミンメイ「ちよつと！乗った事あるんじゃないの？初めて乗った時の輝より酷いぞ！」

離れた場所の物陰から様子を見ていたミンメイが仰向けに倒れたバルキリーに向かってヤジを飛ばす。

アルト「んな事言っちゃって・・・」

アルトは機体を起こすが立ち上がった機体は油の切れたかのようにぎこちない動きをする。

アルト「くそーなんだよこのバルキリーは！こんなんじや美星学園にあつたお飾りのバルキリーのがまだマシだ！」

元々この機体よりも28世代先の後継機を愛用していたアルトにとつてはこの時代のしかも基本操作系統が確立される前の初期型のバルキリーの操縦は想像以上に苦戦を強いられるものであつた。アルトの時代にもコレと同型のバルキリーは存在するがそれらはアツプデートを繰り返すことで性能は上昇してはいるがそれでも軍用機としては型落ちで退役、民間に払い下げされている有様である。

そして今アルトが乗る機体はソレよりも性能が低いのである。性能の差と操作感のズレなどが合わさり元の時代ではエース級だつたアルトの足枷となっている。

アルト「この時代のバルキリーがまさかこんなに扱いにくかつたとはな……。だが！」

ふらつきながらも一通り動作の確認をしたアルト。フラフラのバルキリーを見てリガードは再びミサイルを放つ。

アルト「反応が鈍いなら……。俺がもつと速く動かせばいいだけだ！」

先程とは打って変わり機敏な動きでミサイルを回避しながら距離を詰めるアルト機。

アルト「うおおおつ！」

背部と脚部のバーニアを最大出力で吹かしジャンプしたアルト機はリガードの脚を残った左手で掴む。

アルト「これで……。どうだあああつ！」

脚を掴んだまま自由落下の勢いに任せてリガードを地面に叩きつける。

ドオオオオンツ!!?

叩きつけられたリガードは球体型のボディがボコボコにへこみ動かなくなった。

アルト「ハア……。ハア……」

叩きつけた拍子に千切れたリガードの脚を持ったままピクリとも動かなくなるアルト機、どうやら機体の反応速度を超えたムチャな回

避の影響で機体がオーバーヒートしたらしい。

ミンメイ「アルト！」

そこにミンメイが駆け寄ってくる。

ミンメイ「凄いわアルト！いきなり動きが変わるんだもの、ビツクリしちゃった！」

アルト「こっちに来るな！まだ他にも侵入してきた敵がいるかも……」

ギギ……

他の敵がいらないか周辺を確認しようとしたアルトの目にさつき倒したりガードのボディが微かに動くのが目に入る。

アルト「まさか……逃げろ！ミンメイ！」

ミンメイ「え？」

ギギイツ！

リガードのボディが殻を破るかのように割れて中から巨人が姿を現す。リガードを操縦していたゼントラーデイ兵がまだ生きており中から脱出してきたのだ。

アルト「くそ！動け！動けよ！」

オーバーヒートで完全にガタがきていたアルトのバルキリーはピクリとも動かず直立不動のままであった。

ゼントラーデイ兵「グオオオオツ！」

咆哮と共にバルキリーを殴り飛ばすゼントラーデイ兵。アルト機はなすすべなく吹き飛ばされビルに叩きつけられる。

アルト「ぐあつ!!？」

ミンメイ「あ……あ……」

目の前に迫るゼントラーデイ兵、ミンメイの姿を見て一瞬驚くような素振りを見せたもののすぐに殺意を込めた眼差しで睨みつけミンメイに迫る。ミンメイもゼントラーデイ兵の殺意に当てられてしまったのかその場から動けなくなってしまう。

アルト「ミンメイ！」

アルトの脳裏に最悪の展開がよぎる。

アルト（もしここでリン・ミンメイが死んだらこの戦争は……！）

アルトは最悪の事態だけは避けるべくバルキリーから降りようとするが先程殴られたショックでハッチが歪んでしまい外に出られない。

アルト「クソッ！」

力づくでハッチをこじ開け外に出ようとするアルト。しかしゼントラーデイ兵はすでにミンメイの目前に迫っていた。

アルト「間に合わない・・・のか？俺のせいで・・・？」

ゼントラーデイ兵「グオオオオッ！」

ゼントラーデイ兵は叫び声を上げながらミンメイ目掛けて拳を振り下ろす。

アルト「やめろおおおっ!!？」

ガガガガガッ！

拳がミンメイに振り下ろされる直前、無数の弾丸がゼントラーデイ兵に撃ち込まれる。ハチの巣となったゼントラーデイ兵は吹き飛ばされると二度と動く事は無かった。

フォツカー「大丈夫か？ミンメイちゃん？」

ミンメイとアルトが声のする方を向くとドクロのマークを付けたバルキリーがガンポッドを構え立っていた。ガンポッドの銃口からは煙が上がっている。

ミンメイ「その声・・・輝の先輩さんね？」

フォツカー「艦内に侵入した敵はこれで最後だ。もう心配しなくていいぞ。それと・・・」

フォツカーはアルトの乗っているバルキリーの方を向く。

フォツカー「どうしたヘンリー！随分派手に壊したじゃないか、らしくないぞ？」

アルト「ヘンリー・・・あのパイロットの事か・・・」

アルトは自分達を庇って死んだパイロットの事を思い出す。

アルト（あの人も同じ名前とはな・・・全く）

フォツカー「どうした？返事をしろ！ヘンリー少尉！」

アルト「俺はヘンリー少尉じゃありません。そのパイロットは・・・俺達を庇って・・・」

フォッカー「何?・・・そうか・・・。戦闘機乗りのクセに機体だけ残して逝つちまいやがって・・・。君、名前は?」

アルト「アルト、早乙女アルトです」

フォッカー「アルト君、最後を看取った者として聞かせてくれ。奴は・・・ヘンリーは最後まで軍人としての責務を果たしたのだな?」

アルト「はい、民間人である俺達を守る為に・・・最後まで誇り持って戦いました」

フォッカー「そうか・・・」

フォッカーはハッチを開けて外に出ると破損した機体に向かい静かに敬礼をする。

アルト「・・・」

アルトもまた無言のまま壊れた機体に向かって敬礼をするのだった。

同じ頃、外の戦闘は・・・

クローディア「艦長、内部に侵入した敵機は全て撃破した模様です」

グローバル「うむ、マクロス周辺の敵機は?」

キム「こちらもほぼ全ての機動兵器の撃破を確認、しかしバルキリー隊の戦力が半減した影響でバルキリー隊、デストロイド隊の損害が大きいです」

グローバル「敵母艦の動きは?」

キャシー「はい、・・・え?なんで?」

クローディア「どうしたの?」

キャシー「敵の母艦が急にこちらに向けて回頭を始めてるんです!」

グローバル「何?・・・もしや特攻か?」

ヴァネッサ「特攻!?!?」

グローバル「キム君、本艦に激突するまでの時間は?」

キム「は、はい!ええと・・・約4分です!」

グローバル「・・・やむを得ん。マクロスはトランスフォーマーシオンを使用する。トランスフォーマーシオン完了後、ダイダロスアタックで敵艦を迎撃する。クロードディア君、トランスフォーマーシオン発令、変形完了後艦内のデストロイド隊を至急ダイダロス艦首に集めてくれたまえ」

クロードディア「イエッサー、全機関につぐ！これより本艦はトランスフォーマーシオンを開始する！繰り返す！これより本艦はトランスフォーマーシオンを開始する！」

輝「ツ！マクロスが見えた！」

柿崎「ああっ!??プ、プロメテウスが！」

プロメテウスは側面部が抉られており内部が剥き出しになっており発艦用カタパルトも片方無くなっていた。

未沙「あれじゃあバルキリー隊が殆ど発進出来ない・・・」

ルー「あ、あれが貴方達の母艦？」

マックス「ちよつと大きいですけどね」

ルー「大きいなんてもんじゃないわよ・・・。これじゃ戦艦というよりも要塞じゃない・・・」

一方キャッツアイの未沙はマクロスと通信を行う。

未沙「・・・了解、一条少尉！敵艦がマクロスに特攻を仕掛けようとしてるわ！」

輝「特攻だって!?!？」

未沙「マクロスはトランスフォーマーシオン後ダイダロスアタックで迎撃するわ！マクロスがトランスフォーマーシオン完了するまでなんとか時間を稼いで！」

柿崎「時間を稼ぐっていったって・・・」

輝「こっちももう残弾数が心許ないぞ・・・」

未沙「マクロスが沈むかどうかの瀬戸際なのよ！なんとかしなさい！」

輝「くそ！そっちの言い分ばかり！勝手なんだから！」

悪態をつきながらも輝達は機体を加速させ敵艦に攻撃を仕掛けている友軍に合流、そのまま戦線に加わる。

クロード「トランスフォーメーション開始します！」

マクロスの両舷に接続されたダイダロスとプロメテウスが轟音と共にゆっくりと左右に開いていく。

ルー「な、何をやる気なの？」

柿崎「トランスフォーメーション、マクロスが変形するんだよ」

ルー「変形!?？」

両舷の艦が真横に展開した後、マクロス後部のメインエンジンが真下に向かって、それに連動して艦首の主砲ブロックも真上に向けて可動する。僅か数分の内にそれまで水平だったマクロスはエンジンも主砲も垂直になりその様子はマクロスが直立したとも言い表わせるものだった。

ヴァネッサ「トランスフォーメーション完了しました！」

グローバル「敵艦との衝突までの時間は!?？」

シャミー「あと1分です！」

クロード「ガンサイト1よりバルキリー 隊各機へ！本艦はこれより敵艦にダイダロスアタックを仕掛ける！バルキリー隊各機は周辺より退避せよ！繰り返す！バルキリー隊各機は周辺より退避せよ！」

ルー「今度は何よ〜！」

輝「マクロスが敵艦をぶん殴るんだよ！オタクも早く離れないと！」

予想外の展開の連続で軽いパニックに陥っているルーのZガンダムを引っ張りながら輝機は敵艦から離れる。

キム「艦長！デストロイド隊ダイダロス艦首に配置完了しました！」

グローバル「ピンポイントバリアをダイダロス艦首に収束！」

クロード「ピンポイントバリア、ダイダロス艦首に収束します！」

直立したマクロスの右舷に接続されているダイダロスの艦首に向かって緑色の光が多数集まっっていく。

グローバル「ダイダロスアタック！」

マクロスは突っ込んでくる敵艦に向かいダイダロスで文字通り殴りつける。艦首に張られたバリアのおかげでダイダロスの艦首は敵艦の装甲を突き破り内部に到達する。それと同時にダイダロスの艦首ハッチが開くと艦首部分に待機していたデストロイド部隊が全機一斉にミサイルを発射、敵艦を内部から破壊する。

内部から破壊された敵艦はミサイルの爆発でボコボコと膨れ上がった後、破裂するように爆散した。

クローディア「敵艦の撃沈を確認」

キム「ま、間に合った……」

シャミー「もうホントにダメかと思った……」

そこにキャッツアイから通信が入る。

グローバル「おお、早瀬君か。救難信号の発信元はどうだったかね？」

未沙「残念ながら発信元の船はゼントラーディ軍によつて既に……」

グローバル「そうか……」

未沙「しかし生存者を一名救助する事が出来ました。ただ……」

グローバル「どうかしたのかね？」

未沙「……艦長の予測が当たったかも知れません。その……悪い方に」

クローディア「悪い方？」

グローバル「……そうか」

グローバルはこちらに接近してくるキャッツアイとバーミリオン小隊、そして彼らについてくるZガンダムを姿を確認する。

グローバル「……前途多難だな、全く……」

そう小さく呟くとグローバルはため息をついた。

ユニバーサル・センチュリー

辛うじて敵の撃破に成功したマクロス。しかし息つく暇もなく新たな問題が彼らに降りかかる……。

戦闘終了後、中破したプロメテウスの代わりにダイダロスの甲板にウェイブライダー形態のZガンダムを固定したルーはバーミリオン小队と未沙と共にマクロスのブリッジに上がっていた。そこにはブリッジのメンバーに加えバルキリー隊のリーダーであるフォッカーの姿もあった。

グローバル「SDF-1マクロス艦長のブルーノ・J・グローバルだ。こちらの申し出を受けてもらい感謝する」

ルー「反地球連邦組織エウーゴ所属のルー・ルカです。こちらこそ危ない所をそちらの所属機に助けていただきありがとうございます」

そう言いグローバルの差し出した手を握り返すルー。

ルー「あの、グローバル艦長……」

グローバル「君の聞きたい事は分かっている。もうすぐ答えが出る筈だ」

ルー「答え？」

シャミー「艦長！長距離観測カメラが地球圏の様子を捉えました！ですが……！」

クローディア「どうしたの？」

シャミー「地球の周囲を囲むように巨大なシリンダーの様なものが複数浮いてるんです……」

ブリッジのメインモニターに映し出された地球の姿、地球そのものは特に変わりはないのだがその周囲を取り巻く環境は全く違っていた。

巨大なシリンダー型の建造物が幾つも作られており、それらの集合体が地球を囲むように何ヶ所かに集まっている。

輝「な、なんだアレ……」

ルー「貴方達……コロニーも知らないの？」

グローバル「スペースコロニーか……」

キム「スペースコロニー？」

未沙「かつて1969年にジェラルド・オニールによって提唱された宇宙空間用の人工居住地の事よ」

柿崎「つて事は、あの筒の中に人が住んでるのか!?？」

ルー「一年戦争もコロニーも知らないなんて、貴方達ホントどこから来たのよ……」

グローバル「別世界だ」

ルー「え?」

グローバル「この映像で確証が持てた。……我々はどうかやら私達のいた世界とは異なる世界……別世界に来てしまったようだ」

ヴァネッサ「別世界……ですか?」

未沙「ルーさんの乗っていた機体、私達の知らない単語、歴史、それらもコレが別世界なら説明がつくわ。もつとも、ゼントラーデイが攻めてきていたからこの映像を見るまでは彼女の方が私達の世界に飛ばされてきた可能性もあったのだけれど」

柿崎「で、でも別世界なんて一体いつ飛ばされたんですか?」

マックス「……フォールド」

輝「あの時か!」

グローバル「そうだ、タイミングとしてはそこしか考えられん。我々は月の裏側にフォールドする筈が別世界の冥王星に飛んでしまったのだ。ゼントラーデイも一緒にな」

未沙「ルーさん、今聞いた通り私達はこの世界の人間ではありません。信じてもらえないかもしれないけど……」

ルー「……でもこの戦艦や可変機、襲ってきた敵を見たら信じる他ないでしょう」

未沙「今私達が欲しいのはこの世界の情報です。貴方の知る限りのこの世界の情報を教えて欲しいの」

ルー「わかりました。その代わりにそちらの情報も教えて頂くという

事でよろしいですか？」

グローバル「了解した」

ルー「では、この世界・・・宇宙世紀についてお話します・・・」
輝「宇宙世紀・・・」

一方で戦闘終了後のマクロスタウン、巨大な重機によってアルトの搭乗したバルキリーが運び出されていた。

アルト「・・・」

フォツカー「アルト君だったな」

運ばれていくバルキリーを見つめるアルトに後ろから来たフォツカーが声をかける。

アルト「あの子は・・・ミンメイは？」

フォツカー「ミンメイちゃんならシエルターに退避させた。戦闘が終わったとはいえ戦闘のダメージで建物が倒壊する恐れがあるからな」

アルト「そうか・・・」

フォツカー「君は民間人だな？なぜバルキリーの操縦の仕方を知っていたんだ？」

アルト「そ、それは・・・」

未来の時代でバルキリーのパイロットをしていました。などと言える筈もなくアルトは返答に困ってしまう。仕方なく話題を逸らしてみることに。

アルト「や、やっぱり民間人がバルキリーを動かしたら処罰の対象に？」

フォツカー「ん？ああ、まあ今回は状況が状況だからな。不問になるだろう。俺も後輩を勝手に訓練用バルキリーに乗せた事あるしな」

アルト「は、はあ・・・」

フォツカー「それよりもだ、・・・単刀直入に言わせてもらおうと・・・アルト、お前統合軍に入らないか？」

アルト「俺を・・・統合軍に？」

フォッカー「情けない話だが今回の戦闘でバルキリー隊の戦力は半減しちまってな。人手不足なのさ。見た所スジは良さそうだし・・・どうだ？」

アルト「・・・少し、考えさせてもらっていいですか？」

フォッカー「ああ構わんよ。ノリで決められる事じゃないしな。だが敵がいつ来るかわからない以上あまりのんびりとも待ってられん」
そう言いながらフォッカーはメモを取りその紙をアルトに渡す。

フォッカー「もし統合軍に入隊する気があるのなら明日の朝までにここに来てくれ。軍の宿舎の俺の部屋だ」

そこにフォッカーの通信機に通信が入る。

フォッカー「こちらスカルリーダー」

クローディア『フォッカー少佐、これからの鑑の動向について重要な話があります。至急ブリッジに来てください』

フォッカー「了解、すぐに行く。じゃあなアルト、一晚良く考えてみてくれ」

そう言うとフォッカーはバルキリーで飛び去っていった。

マクロス ブリッジ

フォッカー「すまんクローディア、遅くなった」

輝「先輩！」

フォッカー「なんだ輝も来てたのか」

輝「なんだってなんですか」

グローバル「ルー少尉、説明を始めてくれ」

ルー「はい、まずは私達の世界、宇宙世紀の成り立ちからお話したいと思います」

フォッカー「その口ぶり・・・やはりここは俺たちの世界とは別の世界という事か」

輝「先輩？やはりって・・・知ってたんですか？」

フォッカー「前にも言ったろ？お前の遭遇した人型兵器のデザインがゼントラーディとは違う気がすると。俺とグローバル艦長はそこ

から異世界の可能性を考えていたんだ。ま、限りなくゼロに近い確率だったかな」

ルー「私達の世界では増えすぎた人口による食料危機などの問題に対する解決策として国家の枠組みを超えて作られた政府、地球連邦によつて宇宙にコロニーを建設しそこに人々を移住させる宇宙移民政策によつて現在の地球圏の原型が作られました」

未沙「私達の世界での統合政府と同じね。もつとも成り立ちには大きな違いがあるけど・・・」

輝「でも人口増加の問題はそれで解決したんだろ？」

ルー「確かに人口増加による問題は無くなったわ。でもそのやり方に問題があったの」

フォツカー「やり方？」

ルー「地球連邦政府の関係者や一部の有力者は自分達以外の・・・身分の低い民間人ばかりを宇宙に送り、自分達は環境の安定している安全な地球に残ったんです」

輝「なんだよそれ！」

未沙「まるで移民というより棄民ね・・・」

ルー「そう捉えられても仕方ありません。そしてそれは宇宙に出た人々も同じように考え、徐々に連邦政府から独立しようとする人々も出てきたんです」

フォツカー「殖民地と独立運動・・・時代が変わっても人々はそう簡単には変わらんか・・・。そしてその果てに起きる事も」

シャミー「その果て・・・？」

ルー「宇宙世紀0079、地球から最も離れたコロニー群、サイド3がジオン公国を名乗り地球連邦に宣戦布告をし一年戦争が開戦しました」

グローバル「やはりそうなるか・・・。しかしルー君、宇宙世紀での生産活動はコロニーに依存する割合が高いとはいえそのジオン公国は数あるコロニー群のひとつ、いわば国としては小国に過ぎない。地球圏で唯一の統治機構である連邦に対して国力差があまりにもあり過ぎるのでは？」

ルー「はい、開戦当初の地球連邦も同じように考え戦いはすぐに決着が着くと考えられていました。しかしジオンは新兵器モビルスーツを極秘裏に開発していたのです」

クローディア「モビルスーツ・・・あのZガンダムの事ね」

ルー「当時はあれほど高度な機体ではないですけどね。当時の連邦は戦艦の火力と宇宙用戦闘機が主な戦力でしたがレーダーやセンサーを攪乱するミノフスキー粒子とこの人型兵器であるモビルスーツにより大敗を喫する事になったのです」

グローバル「なるほど・・・レーダーやセンサーが使えなければ戦艦は目と耳を潰されたも同然、どれだけ火力があろうと意味をなさなか・・・」

フォッカー「長距離からの砲撃やミサイルも使えないとなれば戦闘は必然的に敵を直接視認して行う有視界戦闘が主となる。それならば航空機のファイターより人型のバトロイドの方が有利となる」

ルー「元々国力の劣る為に短期決戦を理想としたジオン軍は連邦の本拠地に向けてモビルスーツを使った戦術でコロニーを奪い、それを地球に落としたのです」

未沙「コロニーを地球に・・・!??あれだけの質量が落下すれば地上には甚大な被害が出るのではなくて!??」

ルー「・・・コロニーの落下だけでなくそれによつて生じる2次被害も含め・・・地球の人口の半数以上の人々が亡くなりました」

柿崎「なんて事しやがる！ジオンの野郎やり過ぎだぜー！」

ルー「連邦軍の必死の抵抗により本拠地ジャブローに落ちるのだけは回避されましたがコロニーの落下したオーストラリア大陸は原型を留めない程のダメージを受けました」

グローバル「こちらの統合戦争と同じようなものだと考えていたが・・・それ以上に激しく悲惨な戦いだったのだな・・・」

ルー「ジオンはその後もモビルスーツの優位性を活かして地球に降下して勢力を広めていきましたがジオンのモビルスーツの脅威を知った連邦もモビルスーツの開発を開始し、徐々に劣勢を覆っていききました。そして0080 1月1日、ジオンが終戦協定に調印する事

でこの一年戦争は終結したのです」

柿崎「ようやく平和が訪れたって訳だな」

ルー「いいえ・・・、敗戦したジオン軍の一部は更に遠方の小惑星帯に逃げ延びたり地上や宇宙に残された残党によるゲリラ戦など終戦後も戦いは続いたの。そして連邦はジオン残党討伐を目的としたエリートによる部隊、ティターンズを設立したのよ」

クローディア「ティターンズ・・・」

グローバル「大地にそびえ立つ巨人という訳か・・・」

ルー「ティターンズはジオン残党討伐を目的としながらそれを生み出す温床として宇宙に住むスペースノイドにも弾圧を強行しました」
フオツカー「宇宙に住む人達はみんなジオンの仲間とでもいいたい訳か？」

ルー「実質そのようなものです。自分達のやり方に反感を持つ者がいればコロニー内に平然と毒ガスを流し込むような奴らです」

輝「毒ガス!?？」

未沙「周りが真空で逃げ場の無いコロニーで毒ガスを使うだなんて・・・」

ルー「連邦内外でもティターンズのやり方に反感を持つ者は少なくなく、そういった人々が集まり結成されたのが私の所属する反地球連邦組織エウーゴなんです。そして地球圏は今、エウーゴとティターンズとの戦争状態にあります。これが宇宙世紀の現状です」

グローバル「うむ・・・」

この世界の成り立ちと現状を聞いたグローバルはパイプを口に咥えながら考え込む。

クローディア「ルーさん、地球圏全てがエウーゴ派かティターンズ派かに分かれているの？」

ルー「サイド6など中立のコロニーもいくつか存在はしますが・・・」
グローバル「現状で我々がやらねばならない事は大きく分けて2つ、1つはマクロス補給、そしてもう1つはルー君とZガンダムをエウーゴに送り届ける事だ。優先すべきは艦の補給だが・・・」

未沙「ルーさん、ここからだとか中立が一番近いコロニーは何処かし

ら？」

ルー「私も全てを把握してる訳ではないですけどどこからだと……
ルーはメインモニターに映し出された地図を指差す。

ルー「サイド1のシャングリラコロニーだと思えます。ただ、これ
だけ巨大な艦の補給をそこで賄えるかどうかまでは……」

グローバル「いや、情報があると無いとでは大違いだ。少なくとも
補給が出来る希望は見つかった。クローディア君、マクロスの目的座
標をシャングリラコロニーに設定、すぐに発進する」

クローディア「イエッサー」

グローバル「ルー君、君と機体の受け渡しは補給の後になってしま
うがそれでもよろしいかな？」

ルー「構いません。地球圏に戻ってきた事でこちらからの連絡も行
える筈ですのでそれだけはさせて頂きますけど」

グローバル（何事も起こらなければいいが……）

こうしてZガンダムに乗せたマクロスは補給物資を求め一路、シャ
ングリラコロニーへと向かった。

シャングリラ

補給の可能性を求めシャングリラコロニーに向かうマクロス。

その内部の統合軍の工場区画ではダイダロスから運び込まれたZガンダムの整備が行われていた。

輝「おたくの機体、マクロスの設備でどうにかなるの？」

ルー「ええ、簡単なメンテナンスくらいならなんとかなりそうね」

マックス「でも、先程の戦闘の様子を見る限り動きがぎこちなく見えましたが・・・」

ルー「それはZがカミーユ・ビダン・・・エウーゴのエースパイロット用に調整された機体だからよ」

輝「じゃあ、そのカミーユってパイロットが乗ればこの機体も真価を發揮出来るって事か？」

ルー「まあね。でも勘違いしないでよね？私だってシユミレーターでの成績は良かったんだから、機体の調整が自分用に出ていればあんなヨタヨタな動きなんて・・・」

輝「長くなりそうだ。そつと離れよう・・・」

柿崎「了解です・・・。しかしカミーユちゃんかあどんな子かなあ？」

マックス「カミーユさん、女性の方なんですか？」

柿崎「何言ってるんだよマックス。名前の雰囲気からして女っぽいじゃないか。これで男だったらお笑いだよ！ハッハッハッ！」

マクロス ブリッツ

未沙はZガンダムのデータを見ながらジツと考え込んでいた。

クローディア「どうしたの？難しい顔しちゃって」

未沙「ええ・・・このZガンダムなんだけど・・・機体のサイズも内部機構もマクロスの艦載機とは全く異なる筈なのにどこか既視感を感じてたの」

クローディア「既視感ねえ・・・。でも私達の世界の統合軍にモビ

ルスーツなんて無かった訳だし・・・」

未沙「でね、マクロス内部の統合軍のデータバンクを探してたら既視感の正体がわかったの」

クローディア「本当に？」

未沙「約18mという機体サイズ、戦闘機への可変機構、コレはマクロスじゃ無く別計画で統合軍極東支部で開発されていた・・・」

未沙はそう言いながらモニターに機体データを出す。

未沙「Rシリーズの1号機に似ているわ・・・」

???

『目を覚ませ・・・』

「うう・・・？」

何も見えない暗闇の中、何処からか声が聞こえる。

「だ、誰だ・・・俺を呼ぶのは・・・」

『目を・・・ませ・・・』

「なんだ？何を言ってる？」

『俺・・・そちら・・・まだ・・・困・・・足りな・・・』

声はどんどんと遠ざかっていく。

「お前は誰だ？何を言いたい？」

『枷・・・我の確・・・』

その瞬間、眩いばかりの閃光が走り男の意識はそこで途切れた。

サイド1 シヤングリラコロニー

史上初のシリンドラー型コロニー、宇宙という新天地への希望を込めた“楽園”の名を持つコロニーであるが今はその名とは裏腹に経済状況は悪化の一途をたどっていた。宇宙に浮かぶ人工の居住地であるが故に太陽光を取り入れ一日の日照時間を決めるミラーの操作や雨などの気象のコントロールを取り仕切る行政もその役割を全うし

ているとは言えずコロニー内の街は茶色じみた寂れた雰囲気漂っている。

経済的に厳しい状況からかコロニー内には廃品や中古パーツを取り扱うジャンク屋が多く彼らが所有するスクラップの山が点在している。

この少年もそんなジャンク屋の一人である……。

ジユドー「さあて、今日も一稼ぎしてきますかー！」

ジャンク屋の少年、ジユドー・アーシタはその日もいつものように宇宙に漂うジャンクを回収する為、作業用ポッドのあるコロニーの宇宙港に向かおうと自宅を出る。すると自宅の二階から少女が顔を出す。

リイナ「お兄ちゃん！また危ない事しようとしてるでしょー！」

ジユドー「げ！気づかれた！」

リイナ「学校にも行かないでいつもいつもノーマルスーツも無しに宇宙に飛び出して！もう危ない仕事はやめて！」

ジユドー「悪いなリイナ！これもお前を山の手の学校に行かせる為だ。それに今日はなんかお宝が手に入る気がするからさー！」

そう言つてジユドーは走り去ってしまう。

リイナ「お兄ちゃん！」

シヤングリラ 宇宙港

ジユドーがいつも使っている作業ポッドの側まで来るとジユドーと同年くらいの少年が何人か集まっている。

イーノ「あ、来た。おーい！ジユドー！」

ジユドー「イーノか！……げ」

こちらを呼ぶ大人しそうな風貌の少年、イーノに気づき手を振り返すジユドーだったがその奥にいる少年達を見てその手を止める。

ジユドー「ビーチヤにモンド……お前達も一緒かよ」

ビーチヤ「何嫌そうな顔してんだよ。俺たち仲間だろ？抜け駆けは良くないって！」

モンド「そうそう」

ジユドー「イーノ、お前喋ったな？」

イーノ「ご、ごめんジユドー、隠し事は良くないって言われてさ……」
ジユドー「ホント、お人好しなんだから」

呆れてるジユドーの背後から金髪のポニーテールをした少女が走ってくる。

ビーチャ「あれ？エルじゃんか。どうしたんだよそんな急いで」

エル「ビッグニュース！ビッグニュース！カラバに参加してたアムロ・レイがティターンズに捕まったって！」

ビーチャ「アムロ・レイが!?？ホントかよ!?？」

ジユドー「誰？」

モンド「知らないのかよジユドー？アムロ・レイって言ったら一年戦争で活躍した伝説のエースパイロットだぜ？」

イーノ「確か……ガンダムのパイロットだったんだよね？」

エル「噂じゃいきなりモビルスーツに乗ってザクを撃墜したとか、モビルスーツで大気圏突入したり、ジオンの名だたるエースパイロットを撃破してあの赤い彗星も追い詰めたとか……」

ビーチャ「ま、半分以上は噂から広まったデタラメだろ」

モンド「だよなあ」

ジユドー「ふーん。で、その凄い人が何で捕まっちゃった訳？」

エル「あ、うん。今は地球で反地球連邦運動をしているカラバって組織のパイロットらしいんだけどティターンズとの交戦中にティターンズの新型にやられちゃったらしいよ」

エルは持っていた新聞をジユドーらに見せる。アムロ捕縛のニュースは写真付きで大きく報じられていた。

モンド「これがティターンズの新型？なーんか飛行機から手足が生えたみたいな機体だな」

ビーチャ「なにになに……アムロ・レイを確保した機体のパイロット、ボーマン中尉は……」

ジユドー（ビーチャ達が新聞に夢中になってる隙に……）

そつとその場から離れたジユドーはコッソリと作業ポッドに乗り込む。

ビーチャ「あ！ジユドー！この野郎！」

ジユドー「悪いなビーチャー！この前みたいに一人用ポッドに無理矢理乗り込んでぎゅうぎゅう詰めは真っ平御免なんだ！じゃあな！」

そう言っつてジユドーはポッドのバーニアを吹かして気密区画から出て行く。

シャングリラコロニー周辺の宙域

一年戦争以来宇宙で続く戦いにより大破したモビルスーツの残骸や破片、パーツなどはそのまま宇宙を漂う事になりコロニーの周辺などに流れ着く場合がある。小型船やモビルスーツを所有していればもつと探索範囲を広げる事も出来るがそんな上等な物など持っていないジユドーらこども達はコロニーの外壁などにぶつかり止まるなどの要因でコロニー周辺に溜まったスクラップを漁るしかないのだ。

ジユドー「お、このシールドはキズが少ないな・・・良い値で売れるか？」

作業ポッドのアームを器用に動かしながら漂流している残骸の中から状態の良さそうなパーツを回収していく。

ジユドー「今日はこんなトコかな・・・ん？」

今日の収穫を確認していたジユドーは宇宙空間で大きな影を見つける。明らかに他の残骸よりも大きい。

ジユドー「なんだ・・・？」

何故か気になってその影に向かってポッドを動かすジユドー。影は近づくにつれて段々と鮮明になっていく。

ジユドー「お、おいおいマジかよ・・・」

影の正体のすぐ側まで来たジユドーはポッドについていたライトで照らす。それは傷一つない完全な状態で宇宙を漂う人型の機体だった。

ジユドー「こりゃあとんでもないお宝だぞ！見た感じ連邦のモビルスーツっぽいけど・・・」

ジユド―はポツドのアームを操作して謎の機体を掴もうとする。アームで機体の腕を掴んだ瞬間、ジユド―は何かを感じ取る。

ジユド―「ツ!??な、なんだ・・・?今の・・・」

その時、ポツドの通信機のランプが点灯する。どうやら謎の機体から発せられているようだ。

ジユド―「も、もしもーし?誰か乗ってんの?」

『うう・・・』

接触通信を用いたジユド―の問いかけに対し男の声が返ってくる。

ジユド―「やっぱ人が乗ってるのか?もしもーし!アンタ名前は?」

『俺は・・・俺は誰だ・・・?』

ジユド―「・・・はあ?」

ジユド―「アンタ、記憶喪失なんだよ」

『やはり、そうか・・・』

あの後、ジユド―は機体に乗っている男に色々と聞いてみたが男は何も覚えておらず、名前すらわからない状況だった。

ジユド―「とりあえず、シヤングリラに戻ろうぜ。身の振り方はそれから考えればいいさ」

『済まない・・・』

ジユド―「いいのいいの。困った時はお互い様・・・ん?」

『どうした?』

ジユド―「来る・・・?何か・・・」

『何?・・・機体のレーダーが反応してる?』

何かを感じ取ったジユド―が見た方角に男は機体の向きを変える。遥か彼方から見た事のない機体が数機、こちらに向かってくる。人型ではなくメカで出来たトカゲのような風貌の機体である。

ジユド―「な、なんだアレ!??」

『・・・バグス』

ジユド―「え?何だって?」

『機体の識別データにはそう出てる。どうやら俺はともかくこの機体はあのメカを知ってるらしい』

ジユドー「名前がわかったところでどうすんのさ?」

『わからん。見たところ対話を通じる相手ではなさそうだが・・・』

男がそう言った側からバグスと呼ばれた機体はジユドー達に攻撃を仕掛けてきた。

ジユドー「おわあっ!??ち、ちよつとタンマー!」

『待つてくれる訳ないだろう!・・・ここは俺に任せろ』

ジユドー「任せろつつたつて・・・アンタ記憶喪失なんだろ?戦えんの?」

『どうやら記憶は無くても身体が覚えてる、というヤツらしい。機体のデータを探したらどうやら名前くらいはわかりそうだ』

ジユドー「ホントか?」

『ああ。この機体に登録されてるデータを信じるなら俺は・・・』

男は機体のモニターに映し出された機体の登録データとそのパイロットデータを見つめる。

『俺の名はイングラム、イングラム・プリスケン・・・そしてこの機体の名は・・・』

イングラムは迫り来るバグスからジユドーのポッドを庇うように機体を向ける。

イングラム「・・・R—GUNだ」

アール・ガン

突如飛来し攻撃を仕掛けてきた謎のメカ「バグス」を迎撃する為、戦闘態勢に入るR―GUN。脇にはジユドーを乗せたポッドを抱えながら

突進してくるバグスを回避する。

ジユドー「おわあっ！もうちよつと優しく動いてくれよ！」

イングラム「そんな事言ってる場合じゃないだろう！」

回避の為に機体を動かすがその度にポッドの内部でジユドーが揺さぶられる。そんな事は御構い無しとばかりにバグスは攻撃の手を緩めない。

イングラム「見たところ奴らの攻撃方法は突進による物理攻撃のみのようなな……。こちらの武器は……」

イングラムはコクピット内部のパネルを操作し機体の状態と武装を確認する。

イングラム「武器は頭部のバルカン砲に背中に付いているビームカタールソード、そして手に持っているツインマグナライフルか……」
画面にはもう一つメタルジェノサイダーと書かれた武装もあったがロックが掛けられており使用不可になっている。

イングラム「機体各部は異常なし、推進剤もまだ余裕がある、か……やるしか無い！」

一通り確認を終えたイングラムはR―GUNをバグスに向けてと迎撃態勢に入る。

攻撃してくるバグスは全部で5体、同士討ちを恐れているのか一度に2機以上で攻撃はしてこない為1機ずつ別々の方向から突進をしてくる。

イングラム「絶え間なく攻撃は仕掛けてきているが……パターンさえ読めれば！」

一機のバグスの突進を回避すると同時に突進をかわされてガラ空きとなった背部にバルカンを撃ち込む。バルカンは全弾命中したものの多少ダメージは与えられたのみで撃破には至らず、バグスは方向

転換して再び突進してくる。

イングラム「やはりバルカンでは火力が足りないか……うおっ?!」

攻撃に転じた隙を突いて別のバグスが背後から体当たりを仕掛ける。直撃は避けたものの咄嗟に右手でガードした際の衝撃でライフルを手放してしまう。

イングラム「しまった!ライフルが!」

ジユドー「何してんの!早く拾わないと!」

吹き飛ばされたライフルを回収しようとするがバグスの攻撃に阻まれ思うようにいかない。

イングラム「ならば!」

R―GUNは背中に装備されているビームカッターソードを右手で引き抜くと突進してきたバグスをすれ違い様に切り捨てる。

ビーム刃で両断されたバグスはその場で爆発してしまう。

イングラム「よし……戦える……!だが……」

脇にポッドを抱えてる為左手は使うことが出来ずさらにそのポッドにより重心バランスも偏りが生じ機体が思うように動かないこの現状でビームソード一本で切り抜かれるかといえれば厳しい状況である事には変わりはない。

イングラム「劣勢か……」

ジユドー「イングラム……だっけ?飛んでったライフルの位置、わかる?」

イングラム「ん?あ、ああ……」

ジユドー「その方向に向かって俺のポッドを投げしてくれ!」

イングラム「何を馬鹿な事を!敵に狙われるかもしれないんだぞ!」

ジユドー「どのみちポッド抱えたままじゃうまく動けないんだろ?そうすりゃ左手も使えるしライフルだって回収できる」

イングラム「しかし……」

ジユドー「こんな所で死んでたまるか!シヤングリラ魂をみせてやるよ!」

イングラム「・・・わかった、隙を見て投げる。だが無茶はするなよ?」

ジユドー「記憶喪失なのにいきなり戦ってる人には言われたかないや。こっちはいつでもいいぞ!」

バグスの攻撃からの回避に専念しタイミングを見計らうイングラム。

イングラム「今だ!」

ポッドをライフルめがけて放り投げ、そのまま突進してきたバグスの一体をソードで切り裂く。ライフルの位置まで飛ばされたジユドーはポッドのバーニアを吹かして制動しながらアームでライフルを掴む。

ジユドー「よし!拾ったぞ!」

その直後バグスの一体がポッドに体当たりをしてポッドのバーニアが破損、身動きが取れなくなったポッドはそのまま回転しながら飛ばされる。

ジユドー「うわああつ!?!?」

イングラム「くっ!」

イングラムはR—GUNをポッドに向けて飛ばす。R—GUNを襲っていた二体のバグスもそれを追撃する。ポッドを襲ったバグスがそのままジユドーにトドメを刺す為突撃する。

イングラム「させるか!」

イングラムはR—GUNの持っていたビームカッターソードをバグスに投げつける。ソードはバグスの背中に突き刺さりバグスはその動きを停止する。その隙にR—GUNはポットの元にたどり着きライフルを受け取る。

ジユドー「来るぞ!」

イングラム「ツイン・マグナ・ライフル!ダブルファイア!」

R—GUNがライフルのトリガーを引くと銃口からビーム弾と実体弾が連続して発射される。銃弾は真っ直ぐに二体のバグス目掛けて飛んでいき先に到達したビーム弾が前にいたバグスを貫通、その穴を通過して実弾が後方のバグスに命中する。

ジユドー「すげえ……一発で……」

イングラム「周辺サーチ、増援は無いようだ。なんとかあったか……」

ジユドー「あーあ、ポット壊れちまったか……商売道具だったのにな」

イングラム「すまなかったな」

ジユドー「なあにいいって事よ！代わりにこんな立派なモビルスーツが手に入ったんだからさ！」

イングラム「R―GUNの事か？コイツは……悪いが渡せない」
ジユドー「別に取りうるなんて思っただけ？お前も一緒にジャンク屋やればいいんだからさ？」

イングラム「俺も？」

ジユドー「記憶喪失でどうせ行くあて、無いんだろ？」

イングラム「それはそうだが……」

ジユドー「じゃあ決まり！そうと決まればシャングリラに戻って……」

そこでジユドーの言葉が止まる。

イングラム「どうした？」

ジユドー「あ、アレ……」

コクピットのジユドーが指差した方向にR―GUNのメインカメラを向ける。そこにはコロニーの1/3はあろうかという巨大な戦艦が近づいて来ていた。

ジユドー「な、なんだよあの馬鹿アカイ戦艦は……」

イングラム「マクロス……」

ジユドー「え？マグロ？」

イングラム「マクロスだ……」

ジユドー「なんでそんな事知ってるんだよ？記憶喪失じゃなかったのかよ？」

イングラム「……わからない、見た瞬間脳裏にその言葉が浮かんだとしか……」

ジユドー「もしかしたらお前の記憶と関係があるのかもしれないな

！イングラム、行ってみようぜ！」

イングラム「しかしお前は……」

ジユドー「ポットの推進器は壊れちまって動けないから俺は自力じゃ帰れないの！それに……」

イングラム「それに？」

ジユドー「あんだだけデカイんだ、なんかお宝があるかもしれないだろ？新型のガンダムとか乗っけてるかも！」

イングラム「お前な……」

ジユドー「ほら！早く救難信号出せって！」

こうして記憶をなくした謎の男とジャンク屋を営む少年を乗艦させる事になるマクロス。それはまたひとつの物語の始まりになる事を彼らは知る由もなかった……。

サイン・オブ・ゼータ

マクロス ブリッジ

グローバル「記憶喪失・・・？」

イングラム「はい・・・」

救難信号を発した事でシャングリラに接近していたマクロスに見られ回収されたイングラムとジユドー。現在、ブリッジにて彼らの身辺調査が行われているのだが・・・。

クローディア「何も思い出せないの？」

イングラム「名前とR―GUNの操縦方法のみですね、俺は元からあの機体のパイロットだったらしいですが・・・」

キム「艦長、マクロスにあった統合軍のデータバンクに該当するデータを発見しました。イングラム・プリスケン、階級は少尉、統合軍極東支部所属で現在は極東支部主導で行われるSRX計画のテストパイロットとして登録されているようです」

グローバル「辻褄は合っているという事か・・・」

クローディア「艦長、SRX計画とは？」

未沙「SDF計画とは別に統合軍極東支部で進められている防衛計画・・・」

クローディア「未沙？あなた知ってるの？」

未沙「ええ・・・以前一度だけお父様から聞かされた覚えがあるわ」
シャミー「その、SRX計画とかSDF計画って何なんですか？」

グローバル「異星からの巨大宇宙船ASS―1が地球に墜落しそこから外宇宙には宇宙規模の戦争が存在する事を知った人類はそれに備えて対策を立てなければならなかった。そこで立案されたのが二つの計画だ」

グローバル艦長は未沙に指示をだしてモニターに映像を出す。

グローバル「一つはSDF計画、ASS―1を解析、改修してそこから得られた技術を地球防衛の要とする計画だ。つまり・・・」

クローディア「このマクロスの事ですね」

グローバル「その通り、そしてもう一つが・・・」

モニターに3機のロボットのらしきデータが表示される。

グローバル「ASS—1から得られた技術をより積極的に用いた対異星人迎撃用一撃必殺型機動兵器開発計画、SRX計画だ」

同時刻　その大きさ故にシャングリラから少し離れた所に停泊するマクロスを監視する一隻の戦艦があった。

ゴットン「マシユマー様、巨大戦艦はモビルスーツを収容後、シャングリラに停泊するようです」

マシユマー「そうか・・・しかし連邦め、あんな新造艦を建造していたとは・・・」

ゴットン「それにしても解せません。連邦軍の新型艦がなぜこんな戦略的重要性の無い辺境のコロニーに来ているのか・・・」

マシユマー「戦略的重要性が無いからここに来ているのだ。あの艦がエウーゴかティターンズの所属かは知らないがこんなど田舎のコロニーなら敵に気づかれる事無く慣熟訓練が出来るだろう？」

ゴットン「な、なるほど・・・」

マシユマー「だがその計画も無駄になったな・・・このアクシズ先遣隊の指揮官、マシユマー・セロに見つかってしまったからにはない」
ゴットン「マシユマー様、我々先遣隊の目的はシヤア・アズナブルが放棄した地球圏の偵察の任務を引き継ぎ地球圏の情勢を探る事です」

マシユマー「んな事は分かっている！だからこそあの新造艦がジオン再興の脅威となる前に我々であの新造艦の詳細を本隊に報告せねばなるまい？」

ゴットン「それは・・・そうですが・・・」

マシユマー「心配は無用だ、奴らはまだこちらには気づいていない。我々の艦隊はシャングリラの反対側に回り込み私はまずシャングリラに潜入する」

ゴットン「シャングリラに？」

マシユマー「奴らがシャングリラの近くに停泊しているのはおそら

く物資の補給目的だろう。私はシャングリラからの補給物資に紛れてモビルスーツで艦内に潜入する！その間にエンドラ、サンドラ、ミンドラの各艦とその艦載機で攻撃を仕掛ける……いわば中と外からの同時攻撃で艦を制圧するのだ！」

ゴットン「そんなうまくいきませぬかねえ……？」

マシユマー「フツ、心配は無用だ。見ていてくださいハマーン様……このマシユマー・セロ、貴女より承ったこのバラに誓って必ず！」

ゴットン「まあ始まったよ……」

軍服の胸にさしてあるバラに大事そうに持つマシユマーとその様子を見て呆れるゴットンであった……。

マクロス内部

ジユドー「へへ……イングラムには悪いけど俺、軍人嫌いなんだよね！コツソリ抜け出してもらおうよ……」

ブリッジに向かうイングラムからコツソリと離れたジユドーはマクロス艦内をウロウロしていた。

ジユドー「しっかしただっ広い艦だなあ？まるでモビルスーツが操縦する艦みたいだ。お宝は何処かにあるかなあ……と」

珍しい部品などを探す為わざと通気口や搬入路など正規では無い通路を移動していたジユドーだったがふと立ち止まって辺りを見回す。

ジユドー「あれ？ここつてさつきも通ったような……いやコツチか……」

来た道を引き返したり別の道を選んでみたりを何度か繰り返していたジユドーだったがやがて一つの結論に達する。

ジユドー「……迷ったな、完全に……」

物音一つせず誰も居ない通路で一人途方にくれるジユドーであった……。

シャングリラコロニー 港

輝達バーミリオン小隊は他のバルキリー隊と共にシャングリラコロニーから提供された物資をマクロスに輸送する作業に参加していた。

柿崎「やれやれ・・・なんで俺たちバルキリー隊まで物資輸送に駆り出されなきゃならないんだよ・・・」

輝「文句を言うなよ。マクロスは巨大過ぎてコロニーの港に入れな
いし、このシャングリラコロニーの偉い人が巨大艦を見て住民が怖
がっているから物資は分けてやるから近くに寄るなって言ってるん
だからさ」

マックス「マクロスが近寄れないとなると自力で飛べないデストロ
イドでは運搬は不可能ですからね。で、僕達バルキリー隊の出番って
訳です」

柿崎「わかってるけどさあ・・・」

ボヤいていた柿崎の眼前にはバルキリーよりも大きなコンテナが
迫っていた。

輝「柿崎！余所見してる場合じゃないぞ！」

柿崎「え？うわあああっ!?？」

ガウオークに急制動をかけるも間に合わず柿崎機は止まらずコン
テナに前進する。

柿崎「ダメだあ！ぶつかろうっ！」

ガッ！

コンテナに激突する寸前に横から飛び込んできたバルキリーが柿
崎機を抑えて激突を阻止した。

柿崎「た、助かったあ・・・」

輝「柿崎！大丈夫か！」

輝とマックスがすぐに駆け寄ると助けたバルキリーはその場を離
れようとする。

輝「待ってくれ！部下を助けてくれてありがとう。君の名前は？」

アルト「・・・スカル大隊所属11番機、早乙女アルト伍長です」

輝「早乙女伍長か・・・、君、何処かで会った事あったか？」

アルト「いえ？先日統合軍に入隊したばかりですから・・・」
輝「そうか・・・？勘違いならいいんだ。済まない」

アルト「いえ、では自分はこれで」

そう言うのとアルトはその場を離れまた作業に戻っていった。

柿崎「新兵か、なら俺たちがちやんと面倒見てやらないとな！」

輝「その新兵に助けられたのは何処のどいつだ？」

柿崎「そ、そりやないですよ隊長く！」

マックス「しかし、バルキリーの扱い方がうまい方でしたね。機会があれば是非お手合わせ願いたいです」

輝「それはまた暇な時にだな。コンテナは大丈夫かな？」

輝はコンテナに損傷がないか確認に行く。

輝「損傷は無いみたいだな。良かった・・・」

マシユマー「コラ！乱暴に扱うんじゃない！この馬鹿者！」

輝「うわあ!?!?」

マシユマー「コンテナの中身が傷ついたらどうしてくれる！」

輝「え？あ、えと・・・すみません・・・？」

マシユマー「それで、中身は？」

輝「へ？」

マシユマー「中身は見てないのか聞いてるのだ！」

輝「え？えーと、中身は見てないです・・・？」

マシユマー「そうか！なら問題無い！そのまま安全にあの連邦の艦に運んでくれたまえ！」

言うだけ言うとマシユマーはそそくさとコンテナの影に隠れるように去ってしまった。

輝「な、なんだったんだ・・・一体・・・？」

マクロス内部 機体格納庫

解析と簡単なメンテナンスを受ける為、ZガンダムとR―GUNが運び込まれていた。

ルー「これがR―GUN・・・見たところバルキリーよりはモビル

スーツに近いけどコレは貴方達の、マクロスの世界の機体なのよね？」

イングラム「そうらしい。各部パーツもバルキリーやデストロイドと共通の規格になっている部分が僅かながらに存在しているそうだからな」

ルー「でも貴方も災難よね、記憶喪失だなんて」

イングラム「思い出せない事を気にしても仕方ないさ。俺が統合軍の軍人だという事が確かなのなら俺はここで戦うまでだ」

ルー「そういうモンかしら……。さてと、私はちよつとここを離れるわね」

イングラム「何処に行くんだ？」

ルー「シヤングリコロニーよ。あそこならエウーゴに暗号通信が送れるかもしれないから」

イングラム「そうか、気をつけてな」

ルー「ガンダムは今エンジンに火が入ってるからくれぐれも勝手に乗り回したりしないようにね？」

イングラム「そんな事しないさ」

同時刻 マクロス内部？

ジユドー「歩いても歩いてもだだっ広い通路……。ここは何処なんだよー！」

叫んだところで自分の声が反響して帰ってくるのみで辺りは相変わらず人はおろか生き物の気配すらない。

ジユドー「はあ……。コロニーの外壁だったら一周してもお釣りが来るぞ……。何か目印になるものでもあれば……。ん？」

その瞬間、ジユドーは不思議な感覚を覚える。何も無い筈の通路の奥の暗闇に光が見えた。

ジユドー「あの光は……。もしかして出口か？？」

光に向かって駆け出すジユドー。しかし光は走っても走っても一向に近づいてくる気配は無い。

ジユドー（くそ！もう結構走った筈なのに……！あの光は出口じゃないのか？……でも……）

ついに通路の端、行き止まりまで到達するが光はまだ通路の下側に刺していた。

ジユドー「ここを潜れって事か？」

ジユドーは光に誘われるがままに通路の下側にあるパネルを強引に外し、中に入っていく。こどもが一人這いずってようやく通れるほどの小さな隙間だがジユドーは光を追ってひたすら進んでいく。その時、

ドオオオンツ!!?

ジユドー「な、なんだ!?!」

突然の轟音と共に船体が大きく揺れる。

マクロス ブリッツ

グローバル「何事だ!?!」

ヴァネッサ「敵襲です！シャングリラコロニーの影から正体不明の戦艦が3隻マクロスの左舷側から接近してきます！」

キム「所属不明艦、遠距離からの砲撃でこちらを攻撃してきます！」
クローディア「敵艦の大きさは？セントラーデイの艦よりも小さいの？」

シャミー「は、はい！全長は……推定で400m前後！」

未沙「だとすると相手はおそらくこちらの世界の……！」

グローバル「よりによって損傷しているプロメテウス側への攻撃か……。やむを得ん、これよりマクロスは自衛の為の戦闘行動に移る！クローディア君、物資輸送を行っているバルキリー部隊に緊急帰投命令を出せ！」

クローディア「イエッサー！」

未沙「ピンポイントバリアを左舷に展開！急いで！」

キム「了解！」

マクロス内部 格納庫

イングラム「今の衝撃はなんだ?・・・まさか敵襲!??」

イングラムはR―GUNに搭乗しようとするが現在R―GUNは解析の為機体のパーツがところどころ外されており出撃出来る状態では無かった。

イングラム「くそ!・・・こうなったら!」

イングラムはアイドリング状態で待機しているZガンダムを見る。開いたままになっているコクピットに近づこうとするが・・・

ガシヤアン!

イングラム「何!??」

突然天井のパネルが落下し、イングラムがコクピットに向かうのを止めるようにイングラムの目の前に落下する。その後・・・

ジユドー「うわあああつ!??」

イングラム「な・・・!??ぐおっ!??」

パネルの後からジユドーが落下、イングラムの上に落ちる。

ジユドー「痛てて・・・、外に出れた?ここは・・・」

状況確認の為辺りを見回すジユドー。そんな彼の目に飛び込んで来たのは・・・

ジユドー「これって・・・もしかしてガンダム!??」

眼前に立つZガンダムはただ静かにジユドーを見つめていた・・・。

デュアル・インターセプト。 1

ジユドー「スツゲエ！本物のガンダムだ！こりやあ凄いお宝だ！」
目の前にあるZガンダムを見て喜びのあまり飛び跳ねるジユドー、
その真下には下敷きになったイングラムがいたのだが。

イングラム「ぐえ!!?や、やめろジユドー！いくら体重力区画でも
潰れる！」

ジユドー「へ?・・・あ、イングラム、いたの?」

イングラム「いたの?じゃない!なんでお前がこんな所にいるんだ
!」

ジユドー「い、いやあ・・・道に迷って・・・」

イングラム「なんで目をそらす！」

ドオオオン!

再び轟音が響いてマクロスの船体が大きく揺れる。

イングラム「くっ!また敵の攻撃か!?!」

ジユドー「いや、違う・・・この衝撃は中の方からだ！」

マクロス 物資保管庫

バルキリーによる補給作業により置かれたコンテナ類の一つが内
側から破壊され中からMSが一機姿を表す。

マシユマー「フハハハハ!潜入は成功のようだな。見てて下さいハ
マーン様、このマシユマー必ずや貴方のお力になってみせます!この
ギャンで！」

ギャンと呼ばれた壺のような頭をしたMSの目が怪しく光り、右手
に持ったビームサーベルをふるい保管庫の壁を破壊する。

・・・潜入前、エンドラ ブリッジ

マシユマー「よし、これより潜入を開始する。私が合図を送ったら
お前たちはMS隊を発進させて外側から攻撃を開始するのだ！」

ゴットン「うまくいきますかねえ・・・?」

マシユマー「何を弱気な事を言っている!心配するな!この作戦は
必ず成功する!では私は行くぞ!ガルスJを出せ！」

ゴットン「マシユマー様、ガルスJはまだ組み立て前のパーツの状態です」

マシユマー「何？そうか、ではガザDで行く！」

ゴットン「ガザシリーズは変形機構に不備が見つかりメカニック班が現在改修中です」

マシユマー「・・・ならばゲルググで！」

ゴットン「ゲルググはジェネレーター調子が悪く出力が上がりにせん」

マシユマー「じゃあ何なら出せるのだ！」

ゴットン「そうですね・・・今のタイミングで動かせるMSですと・・・」

マシユマー「まさかギャンに乗る事になるとは・・・いや、この機体はかつての一年戦争の時にかの知将マ・クベが乗り込み連邦の伝説のエースパイロット、アムロ・レイを撃墜寸前まで追い詰めたと伝えられるMS。基本スペックは申し分ない筈だ！」

ギャンは右手の高出力ビームサーベルと左手に装備したシールドに内蔵されたミサイルを駆使してマクロス内部の隔壁を破壊しながら歩を進めていく。

マクロス ブリッジ

未沙「艦長！コンテナ保管庫より熱源反応を探知！隔壁を破壊しながら市街地エリアの方向へ向かっています！」

グローバル「何？敵の別働隊か・・・？とにかく市街地に入れる訳にはいかない。デストロイド隊を至急向かわせるのだ！」

未沙「了解！」

グローバル「グローディア君、バルキリー隊の発進状況は？」

グローディア「順調とは言えませんが・・・。コンテナ輸送でほとんどの機体が出払っていましたし、加えて敵戦艦からの砲撃、帰還した機体への各種武装の取り付けにも手間取ってるようです」

キム「艦長！敵戦艦から熱源の射出を多数確認！こちらに向かって来ます！」

艦長「何？ミサイル・・・いや、違うな。これは機動兵器・・・M
Sか！クローディア君、バルキリー隊の発進を急がせるのだ！」

クローディア「イエッサー！」

フォツカー『ブリッジ！聞こえるか！こちらフォツカー！』

未沙「フォツカー少佐!?!？」

フォツカー『発進許可を出してくれ！俺のバルキリーはもう武装の
取り付けが終わってる！後方でコンテナ輸送の指示を出してたのが
幸いしたな！敵戦艦からの砲撃が始まってる以上、艦載機が向かって
くるのも時間の問題だろう・・・出れる機体だけでも出さなけりや
られるぞ！』

未沙「しかし敵戦艦の砲撃がプロメテウス側に来ている今の状況で
は発進許可は出せません！出撃中に撃墜される危険も！」

フォツカー『じゃあこのまま手も足も出さずにやられるって言うの
か!?!？』

クローディア「未沙、代わって。私が許可を出すわ。いいわね？ロ
イ？」

フォツカー『ああ、君の事なら信じられる。それで死んでも悔いは
無いさクローディア』

クローディア「オーケー。スカルリーダー、カタパルトに移動して
ください」

フォツカー『了解！』

敵戦艦からの砲撃がマクロス左舷を襲う中、プロメテウスのカタパ
ルトにフォツカーのバルキリーが現れる。白を基調としつつ黒と黄
色のラインが入り尾翼にはジョリーロジャースを彷彿とさせるドク
ロのマークが刻まれている。

未沙「少佐・・・」

クローディア「・・・スカルリーダー、発進どうぞ！」

フォツカー「ロイ・フォツカー、発進する！」

クローディアの指示と同時にメインエンジンに点火しフォツカー
機はカタパルトを加速していく。その時、砲撃の一つがカタパルトの
すぐ脇に命中する。爆炎が上がりフォツカーのバルキリーは黒煙に

包まれ見えなくなってしまう。

未沙「フォツカー少佐!?!」

クローディア「……………」

思わず声を上げてしまう未沙と違い隣にいるクローディアは悲鳴も上げずにカタパルトを見つめている。その瞬間、黒煙を突き破り白い機体が翼を広げて現れた。

フォツカー「これより敵艦載機の迎撃に向かう!」

そうブリッジに連絡を入れたフォツカーは彼方に見える敵影を見据え、愛機のペダルを深く踏み込んだ。

マクロ艦内

マシユマーの操るギャンは手にした武装を駆使して艦内の隔壁を次々と破壊しながら進行していくがやがて艦内市街地にたどり着く。街は既に避難指示が出て住民はシェルターに避難している為、無人となっていた。

マシユマー「む?なんだこの街は……?なぜ戦艦の内部にこんな所があるのだ?」

そこに迎撃のために統合軍のデストロイド部隊が到着、ギャンに向かって攻撃を開始する。

マシユマー「データにない機体!やはり連邦の新型MSか!だが!」

デストロイド隊の攻撃をかわしつつギャンはミサイルシールドからミサイルを放ち前方にいた小型デストロイド、トマホークとディフェンダーに命中させる。ミサイルの爆風で怯んだ隙に一気に間合いを詰めて後方に陣取るモンスターのキャノン砲をビームサーベルで切り裂き無力化、駄目押しと言わんばかりに機体にサーベルを突き刺し沈黙させる。

マシユマー「まるで手応えがないな!連邦の新型とはこんなものか!」

その時、地鳴りとともにギャンの立っていた地面がひび割れ何かが

突き破り飛び出てくる。

マシユマー「あ？何!?!？」

突然の事に困惑しそのまま転倒するギャン。

マシユマー「なんだというのだ！一体!！」

突き破られた地面の辺りには衝撃で砂埃が舞っており突き出てきたその物の姿を窺い知る事は出来ない。マシユマーはギャンの体勢を整えながらミサイルシールドを構える。やがて砂埃が晴れ、その正体が露わになる。

マシユマー「あ、あれは……!！」

地面を突き破って出てきたのはZガンダムだった。腰の部分がつかえてしまっているようで上半身だけでバタバタもがいている。そのコクピットにいたのは……

ジユドー「あちやく引つかかっちゃった？なんか変な所出ちやつたし……どーしましよ……コレ」

デュアル・インターセプト。 2

マシユマー「あの顔つき・・・間違いはない！新型のガンダム！やはりいたか！」

特徴的なV字アンテナにツインアイ、ガンダムタイプのMSの特徴ともいべき要素を持ったMSを目の前にしてマシユマーは確信する。その一方でZガンダムの方はというと相変わらず引つかかった穴から抜け出そうとバタバタもがいていた。

ジユドー「くそー！上手いことつかえちやつて！早く抜ける！コノ！」

なぜこのような事になってしまったのか？話は少し遡る・・・。

マシユマー機がコンテナから出てきた時間・・・

イングラム「くそ！」

ジユドー「あ！おい待てよイングラム！」

内部からの衝撃で侵入者の存在を悟ったイングラムは解析途中で動かせない愛機R—GUNの代わりにZガンダムに乗ろうとする。

ジユドー「これ、お前の乗ってたMSじゃないんだろ？動かせるのかよ？」

イングラム「わからん！だが今ここで俺が動かせそうなのはこれしかない！」

ジユドー「ん？イングラム！足下になんかあるぞ！」

イングラム「足下？」

コクピット内部で出撃の準備をしていたイングラムが機体の足下を見るために身体をコクピットから乗り出す。その瞬間ジユドーがイングラムを蹴り飛ばしZガンダムから降りしてしまう。

イングラム「何をする!?？ジユドー!?？」

ジユドー「へへっ、悪いなイングラム。この機体ガンダムなんだから？」

イングラム「だったら何だ！」

ジユドー「高く売れるってことさ！えーと、スラスタは・・・こ

れか！」

ジユドーがコクピットのパネルを弄るとZガンダムはその場でいきなりウェイブライダーに変形を始めてしまう。

ジユドー「ありやあ!?? 違ったか!??」

イングラム「無茶だよせ! こどものオモチャじゃないんだ!」

ジユドー「なんのこれしき! みてろよ... これで!」

再びパネルを操作するジユドー。するとウェイブライダーのスラスターが点火される。

ジユドー「よっしゃあ! 見たかイングラム!」

イングラム「バカ! その状態でスラスターに火を入れたら...!」

ジユドー「へ?... うわあああつ!??」

スラスターの向き全てが後方に集約されるウェイブライダー。その状態でスラスターに点火をすればあとは一直線に飛んでいくだけである。

変ハンガーで無理矢理変形したため真上を向いていたウェイブライダーはそのまま天井を突き破り飛んでいく。

イングラム「うっ!??」

崩落する天井の瓦礫から身を守りながらもイングラムは飛び立ったウェイブライダーを追う。

ジユドー「ダメだ! このままじゃいずれ壁にぶつかって俺もガンダムもタダじゃ済まない!」

なんとか機体を止めようとするジユドーだが一向に機体は止まらない。やがて隔壁が目前に迫ってくる。

ジユドー「ヤバイ!??」

とっさに近くにあったパネルを操作するとウェイブライダーは再びZガンダムの姿に変形する。

ジユドー「よっしゃあ! これでなんとか... ダメだ! ぶつかる!」
変形出来たとしても加速した機体が急停止する筈もなくZガンダムはそのまま隔壁に激突、突き破ってしまう。隔壁を突き破ったガンダムの上半身のみが市街地に露わになり現在に至るといふ訳であるが...

マシユマー「ガンダム！その首貰い受けるぞ！」

ジユドー「わー!?？ち、ちよつとタンマー！」

ギャンのシールドからミサイルが発射されZガンダムに迫る。焦ったジユドーは思わず操縦桿のトリガーを引く。

ガガガガガッ！

Zガンダムの頭部に装備されているバルカン砲が発射されミサイルを迎撃する。バルカンをすり抜けた何発かのミサイルがZガンダムの周囲に着弾、地面を吹き飛ばしそのはずみで引っかかっていた地面も脆くなる。

ジユドー「今だ！いつけえっ！」

足下のペダルを目一杯踏み込み脚部スラスターを全力で噴射する。轟音と共にZガンダムの巨体が浮き上がり地面から抜け出し、ギャンから距離を取って着地する。

ジユドー「な、なんとか出られたか・・・」

一方、イングラムも広大なマクロス艦内の移動用に設置されていた統合軍製の軍車両を使いZガンダムを追ってマクロス市街地に到着する。

イングラム「あれは・・・MSか!?？さっきの音はコイツが？」

辺りに散乱するデストロイドの残骸の山を見て敵MSが只者ではない事を悟るイングラム。一方で対峙するジユドーの乗るZガンダムは操作に慣れてない為か動きがややぎこちない。

イングラム「やめろジユドー！お前がかなう相手じゃない！退け！」

ジユドー「俺だって戦争なんてしたくはないけどさ・・・」

一歩一歩後ろに後退りするZ、ギャンは対照的にサーベルを構えてゆっくりと近づいていく。

マシユマー「どうしたガンダム！とつととかかって来んか！」

ジユドー「くそ！何か武器は・・・ビームライフル？これか！」

コクピットの操作パネルにビームライフルが写し出された為、とにかく使おうとパネルをメチャクチャにいじる。が・・・

ポイツ

マシユマー「は？」

ジユドー「へ？」

イングラム「な？」

メチャクチャな操作のせいかZガンダムは持っていたライフルをその場に投げ捨ててしまう。

ジユドー「やばい！操作間違ったかな？えーと、えーと、これならどうだ！」

バチン！

焦ったジユドーはまたコクピットのパネルを操作すると今度は左腕のシールドが切り離された。

イングラム「何やってんだアイツは・・・」

自分から武器を捨てるといういわば自殺行為にイングラムは思わず頭を抱えてしまう。

マシユマー「・・・フフフ。そうか！そういうことか！」

このZガンダムの行動を見ていたマシユマーは何かを悟ったように笑みを浮かべる。

マシユマー「なるほど、そういうことならば全て合点がいくというもの・・・ならば！」

マシユマーの駆るギャンがゆっくりとZに近づいてくる。

ジユドー「や、やられる!?？」

マシユマー「はああああっ！」

ジユドー「うわあっ!?？」

ブウン！

突如、ギャンは持っていたミサイルシールドを投げ捨てた。

ジユドー「・・・へ？」

イングラム「は・・・？」

マシユマー「ガンダムのパイロット！自らライフルとシールドを捨てるその姿勢！この私を真の騎士と見抜いての行動とみた！流石と言っておこう！」

ジユドー「あ、えーと・・・うん・・・」

マシユマー「ならばこちらもその姿勢に応えねばなるまい！さあ、サーベルを抜けガンダム！一対一の決闘、受けて立つ！」

ギャンは右手の高出力ビームサーベルを両手で握り直すと仰々しい構えをとる。

ジユドー「あのパイロット・・・もしかして・・・」

イングラム「・・・バカか・・・？」

マシユマー「どうしたガンダム！とつととサーベルを抜かんか！」

ジユドー「そうは言ったって・・・コレか？」

ジユドーがパネルを操作するとZガンダムの腰部サイドアーマーが開きビームサーベルの柄が射出される。しかし慣れてないジユドーはサーベルの柄を上手くキャッチ出来ず取り落としてしまう。

マシユマー「何をしているか！・・・ホラ」

ジユドー「あ、ども」

転がり落ちたサーベルをギャンが拾うとZガンダムに渡す。Zガンダムがサーベルの柄を握るとビーム刃が発振される。

マシユマー「準備はいいようだな、では・・・いざ！勝負！」

ギャンがビームサーベルを振りかぶりZガンダムに襲いかかる。

ジユドー「き、来たあっ!?？」

マクロス周辺宙域

単独で出撃したフォッカー機はマクロスに向かって進軍中のジオンのMS部隊と接敵、交戦が始まっていた。

ジオン兵「隊長！コイツ速いです！」

隊長「慌てるな！敵は1機だ、こちらは12機！落ち着いて火力を集中させるのだ！」

フォッカー「く！」

敵の数の多さに流石のフォッカーも回避に専念せざるを得なくなる。

しかし、その中でも敵の部隊の動きは冷静に見ていた。

フォッカー（敵は全部で12機、動き方を見る限り実戦経験があり

そうなのは後方の指揮官機のみで後はセオリーに則った教科書通りの真面目な動き方、新兵か？機動性ではバルキリーのが上だがいかんせん数が多い・・・)

フォッカーはチラツとコクピット内の計器の中にある推進剤の残量に目をやる。

フォッカー「やはり、一人じゃちと厳しいか！」

バルキリーに搭載されているエンジンはマクロスから得られたオーバーテクノロジーを利用した熱核反応タービンエンジンである。これは大気圏内であれば推進剤を使わず、理論上無限に近い航続距離を得られる代物であるが、大気の無い宇宙空間では従来の航宙機同様推進剤を噴射して飛行する必要がある。しかもバルキリーは可変機構を優先して設計された都合上この推進剤のタンク容量が多く取れず、宇宙空間での飛行時間が極端に短くなっているという弱点があった。

後方から指揮を出す指揮官用ザクⅡとガザC部隊はフォーメーションを崩す事なく各機が交互に攻撃を行いフォッカー機に攻撃の隙を与えないように動く。フォッカーは変形機構を巧みに使いながら回避しているがそれが推進剤の消費ペースを更に早める。

フォッカー「万事休すか！」